

## 【外部評価報告書】

委員氏名 廣安 知之

## 【評価1】内部質保証システムの実効性について

- ・ 東洋大学の内部質保証システムは、実質的に機能しているといえるか。
- ・ 特に、教学中長期計画の推進プロセス（学長ヒアリングや提言の効果）は、学部・研究科・センター組織等の活動や成果を生み出すことに良い影響を与えているか。
- ・ 学生の学習成果を適切に把握し、3ポリシーの実現に向けて活用できているか。

本項目に設定された3つの問いに対して、東洋大学の取組は概ね高く評価できる。内部質保証システムは全学的に整備され、実際の運用もなされており、特にデータを活用して学生の学習成果を把握し、3ポリシーの実現に接続する仕組みが構築されている点は重要である。

一方で、「実質的に機能しているか」という観点からみると、PDCAサイクルのうち、Plan および Do の段階については着実に進展しているものの、Check および Action の段階については、すべての組織・活動において十分に展開されているとは言い難い。報告書においても指摘されている通り、改善活動が組織横断的かつ継続的に循環している状態にはなお課題が残されている。この意味において、現時点では「実質的に機能している」と断定するよりも、「機能しつつある発展段階にある」と評価するのが適切である。

また、各学部・研究科に自己点検評価活動推進委員会が設置されているが、その位置づけや教授会との関係性については必ずしも明確ではなく、組織運営上の整理が求められる。ただし、こうした点は制度の本質的な有効性を損なうものではなく、むしろ全学的に統一された枠組みのもとで内部質保証システムが構築され、実装されている点を重視すべきである。

さらに、本評価にあたっては、制度の整備・運用状況にとどまらず、大学を取り巻く環境変化の中での位置づけを踏まえる必要がある。日本の私立大学は、創設期および高度成長期を経て、現在は人口減少およびAI技術の進展という大きな転換期に直面している。こうした中で、東洋大学の取組は、単なる内部質保証の枠組みを超え、将来の大学像を見据えた変革の基盤として機能している点が評価できる。今後、東洋大学がさらに発展するためには、1) 他大学と比較して代替不可能な建学理念、2) 財務基盤の健全性、3) 収入の安定構造、4) 今後の社会に要請されている教育の改革と実施、5) 国際化・リカレント・社会人教育などによる大学進学者の拡大が必要であると考えられる。内部質保証システムは、これらの課題に対して戦略的に対応するための基盤として、今後さらに高度化されることが期待される。

学長ヒアリングも、全95組織すべてに対して実施されており、これは学長が各組織に対して問いを掲げる活動であると位置づけられる。このような取組は、校祖である井上円了氏が展開した「田学活動」にも通底するものであり、大学の理念を現代的に再解釈しつつ組織運営に接続する試みとして、高く評価できる。実際に、教学中長期計画の推進プロセスにおいても、各組織の活動や成果の創出に一定の好影響を与えていると認められる。

また、「未来を哲学する、東洋大学」というミッションは、他大学と比較しても独自性が高く、代替不可能な理念である。この「哲学する」という営みを、当たり前を問い直し、本質を捉え、それを次の行動へと接続するプロセスと捉えるならば、これは内部質保証の本質とも合致するものである。

一方で、今後の発展に向けては、こうした「問い」を学長からのトップダウンにとどめるのではなく、各組織が自律的に生成し、相互に検証し合う仕組みへと発展させていくことが重要である。その際には、

既に整備されているデータ基盤を活用し、エビデンスに基づいた問いの設定と改善活動を一体的に推進することが求められる。

以上より、東洋大学の内部質保証システムは、全学的に整備・運用され、一定の成果をあげている一方で、改善サイクルの深化および自律的な問いの生成という点において、さらなる発展の余地を有していると評価する。

#### 【評価2】教育DX推進基本計画の進捗について

教育DX推進基本計画の実行により、特に以下の3つは、学生主体の学び（Learning Journey）に繋がる特長ある取り組みとなっているか。

- ・ 「東洋大学公式アプリ」を活用した学びの羅針盤
- ・ 「総合知」教育による学習者本位の教育（「総合知アプリ」による学びのデザインを含む）
- ・ 新学年暦（13+2）によって生み出される多様な学び

東洋大学の教育DX推進基本計画は、デジタル技術および制度設計を組み合わせることにより、「学生一人ひとりが物事の本質に迫って深く考察する主体的な学び（Learning Journey）」の実現に向けた基盤を構築しつつあると評価できる。特に、本評価項目で挙げられている3つの取組は、それぞれが学生の主体的な学びを促す中核的な機能として設計されている。

##### （1）「東洋大学公式アプリ」を活用した学びの羅針盤

本アプリは、学生が自身の学習到達度や履修状況を可視化し、自らの現在地を認識することを可能とする点において、自己省察を促す基盤として機能している。これにより、学生が自ら学びを振り返り、次の履修計画や目標設定へと主体的に行動する契機を生み出していると評価できる。また、学修支援の情報が一元的に統合されることにより、大学生活全体の満足度向上にも寄与していると考えられる。

一方で、本アプリは完成形ではなく、継続的な改善を前提とした発展途上のシステムである。特に、学習データの提示にとどまらず、それが具体的な行動変容へと結びついているかについては、今後の検証が求められる。また、大学全体を一つの「OS」と捉え、アプリをそのインターフェースとして機能させるという方向性をさらに発展させることが期待される。

##### （2）「総合知」教育による学習者本位の教育

「総合知」教育は、AI等の技術を活用しながら、学生が自らの興味関心や潜在的な志向に気づき、専門分野を横断した学びを設計することを可能とする点において、学習者本位の教育を具体化する取組である。学部・キャンパスといった従来の枠組みを越え、学生が自律的に学びを構成する行動を引き出している点は高く評価できる。

一方で、本取組は導入初期段階にあり、継続的なコンテンツの拡充および参加学生の裾野拡大が今後の課題である。また、この取組は学生主体の学びの実現にとどまらず、現代の大学が直面する社会人教育やリカレント教育の拡充、さらには学びの多様化を通じた新たな学生層の獲得にも資する可能性を有している。

### (3) 新学年暦(13+2)によって生み出される多様な学び

新学年暦の導入により創出された柔軟な時間構造は、学生に対して教室外での多様な学び(留学、インターンシップ、ボランティア等)に挑戦する機会を提供している。特に、T-Weeks の導入は、学期開始前に学修計画を主体的に設計する契機となり、学びに対する意識の転換を促す仕組みとして評価できる。

さらに、この時間的余白は、各学部が独自の教育プログラム(企業調査実習、合宿型教育等)を展開する原動力ともなっており、組織的な教育改革を誘発する効果も認められる。一方で、T-Weeks やオンデマンド授業における学修の質保証および学習成果の把握については、現時点では十分な方法が提示されておらず、今後の重要な課題である。

以上の3つの取組は、それぞれが独立した施策ではなく、「可視化(アプリ)」「探索(総合知)」「時間設計(13+2)」という異なる側面から学生の Learning Journey を支える構造を形成している。このような統合的設計は、教育DXの本質を踏まえたものであり、高く評価できる。現段階では、これらの仕組みが「設計されている状態」から「学生の行動変容および学習成果の向上として実証される状態」への移行途上にある。今後は、各施策の効果をエビデンスに基づいて検証し、改善へと接続する仕組みを確立することが求められる。

以上より、東洋大学の教育DX推進基本計画は、学生主体の学びを実現するための先進的かつ体系的な取組として評価できる一方で、その実効性をさらに高めるためには、学習成果との接続および継続的改善の仕組みの強化が必要である。

## 【外部評価報告書】

委員氏名 宮原 京子

## 【評価1】 内部質保証システムの実効性について

- ・ 東洋大学の内部質保証システムは、実質的に機能しているといえるか。
- ・ 特に、教学中長期計画の推進プロセス（学長ヒアリングや提言の効果）は、学部・研究科・センター組織等の活動や成果を生み出すことに良い影響を与えているか。
- ・ 学生の学習成果を適切に把握し、3ポリシーの実現に向けて活用できているか。

## 1. 実質的に機能しているといえるか

- ・ 3つのポリシーを起点としたPDCAを昨年よりも深化した形で全学的に浸透するための様々な取り組みが行われていることは大いに評価できる。
- ・ 特に、仕組みを構成するにあたり、その基盤となる考え方が学生を中心に据えたデザインであり、また、教職員が上下関係を超え、共通の目標である「学生の成長」のために協働する文化が醸成されつつあるとの印象を受けた。
- ・ また、昨年度の改善提言を受け、評価の仕組み（シートや方法論など）の改善に引き続き取り組み、教職員の負担軽減につながりかつ、プロセスの質と均霑化に資する方向性であると評価できる。
- ・ 一方、各個別プロジェクトの経過や成果からは、目標設定のあり方、プロジェクトのマイルストーンの管理の在り方など、まだばらつきがあり、また、それらいわゆるプロジェクトマネジメントスキルの濃淡、偏在の解消が道半ばであることが示唆される。
- ・ 今後の提案としては、目標設定がすでに「実施」ではなく「成果」となっているプロジェクトについては、単なる「成果」ではなく、学生の学習効果に結び付く目標設定の在り方を、また、プロジェクトの進捗自体に課題のあるものについては、まずはプロジェクトマネジメントにのっとった目標設定、KPIの洗い出し、マイルストーンの設定、など一律のプロセスをあえて導入し、マネジメント手法になじんでもらうような、多層化のアプローチがあってもよいと思われる。

## 2. 教学中長期計画推進プロセスについて

- ・ 学長による対話型の定期的な進捗管理プロセスは、類を見ない画期的な取り組みであり、企業で言えば、トップマネジメントのコミットメントと熱量の重みを浸透させ、大学が進化し続けなくてはならないカルチャーの醸成に貢献していると評価できる。
- ・ のべ170時間を超える時間を費やし、プロジェクト一つ一つを丁寧にレビューし、現状把握を超えた「目標の相互理解」と「計画の上方修正」を行うコミュニケーション機会として機能していると評価した。
- ・ 目標設定も「学生の学習効果」、すなわちアウトカムにつながるかに取り組み、一部のプロジェクトでは明確にその成果が表れつつある。
- ・ 評価項目の精査や、進捗管理プロセスの負担を軽減しつつ、よりインパクトのある成果につなげられるか、全学共通指標と学部固有指標を整理するなど、さらに一歩進んだ取り組みが求められる。

## 3. 3ポリシーの実現に向けて活用できているか

- ・ TOYO Data PortalやGPAの可視化など、日本の大規模大学として、意欲的なエビデンスベースの改善課題の特定、意思決定、効果の検証ができる仕組みが整っており、これらのデータが蓄積されることで、さらに3ポリシーをどう有機的に連携させた取り組みを推進できる素地ができ、大きな可能性を感じる。
- ・ また、これらのデータが学生個人々人で参照できることで、意欲のある学生が積極的に自分の学びの現在地を理解したうえで、さらなる学習のデザインができる仕組みが整っている。

- ・ 課題としては、教職員側では、カリキュラムや入試の仕組みなどに有機的に活用するためには、この膨大なデータをどう分析するか、どう解釈して、取り組むべき課題を特定するか、大学全体でのスキルとプラットフォームづくりが引き続き求められる。例えば、データから自動でインサイト（洞察）を提示する AI 補助機能や、専門のアナリストによる各学部への伴走支援なども今後検討できるのではないかと。
- ・ 学生側の課題としては、これらの個々人のデータを学生が参照する比率がまだ 40%弱にとどまることを鑑み、教育 DX の取り組みとともに、さらなる設計や活用のユーザーインターフェースの見直しや、学生側の意識改革が必要である。
- ・ 今後については、教職員側がカリキュラムや入試制度などを有機的に結びつけるための管理データのさらなる活用について、特に具体的に年度別にどこまで達成するのか、Breakdownして目標を設定し、フォローすること。学生側は、そもそも、さまざまな目的で存在しているアプリを一元化し、東洋大学に入学してから卒業するまで、必須のアプリとして個々人が履修や成績をフォローできる仕組みを構築してはどうか。
- ・ さらには、卒業後もその後のキャリアをフォローできるアルムナイのツールも検討してはどうか。

#### 【評価 2】教育 DX 推進基本計画の進捗について

教育 DX 推進基本計画の実行により、特に以下の 3 つは、学生主体の学び（Learning Journey）に繋がる特長ある取り組みとなっているか。

- ・ 「東洋大学公式アプリ」を活用した学びの羅針盤
- ・ 「総合知」教育による学習者本位の教育（「総合知アプリ」による学びのデザインを含む）
- ・ 新学年暦（13+2）によって生み出される多様な学び

1. 学生主体の学びが DX の仕組み（公式アプリおよび総合知アプリの活用を含め）によって推進されているか
  - ・ 3 万人を擁する大規模大学において、学習の個別化、主体的選択を可能にする、革新的なツールとして DX を基盤に推進する方針は、国内の他の多くの大学との差別化となりうる画期的な取り組みであり、その先見性に敬意を表する。
  - ・ 特に、公式アプリによって、学習の進捗を自ら確認でき、大学一括の必要な情報の配信、対話型の仕組みなど、デジタルネイティブ、AI リテラシーの高い世代である学生がなじみやすく、根底に 3 つのポリシーの実現を目指した取り組みといえる。
  - ・ 特筆すべきは、2025 年度に始まった総合知の取り組みであり、文理・所属学部を超えた、学際的な学びの機会の提供は、これからの社会の多様なニーズに対応する先進的な取り組みであり、希望する学生の選択を支援する AI を活用したシミュレーターやナビゲーターなど、開始するにあたってしっかりと準備してきたことがうかがえた。
  - ・ 一方、課題としては、1) アプリの活用度の改善、2) 総合知の取り組みのさらなる推進である。1) のアプリの活用については、公式アプリがまだ、情報取得ツールの位置づけであり、学生が入学してから卒業するまで、東洋大学で在籍し学び活動するための必須ツールとして位置づけられていないことが影響しているのではないかと。DX のさらなる推進という意味では、海外の多くの大学がすでに取り入れている Learning Management System の個別化により、学生から見て、履修の際の設計やシミュレーション、学生生活にかかわる各種手続き、情報収集や、就職相談まで、AI と対話しながら学生生活を設計し日々をマネージできるプラットフォームとしてデジタルキャンパス・ハブに深化させ、必須のツールとして位置づけることを検討するべきである。
  - ・ また、総合知の取り組みはまだ始まったばかりであり、今後活用した学生の事例が蓄積されることで、さらなる進展があることを期待するが、一方で、利用した学生が 10%未満であったことを鑑み、学生のインセンティブになるような仕掛け、また、学生がその価値を真に理解できるよう、さらなる広報、情報提供、きっかけづくりを行っていくべきと考え

る。

- ・ また、総合知の取り組みは、ダブルメジャーやマイナーメジャー（副専攻）に一部通じるものがあるが、大学としてそういう履修の形態に取り組むかも、議論を深めてはどうか。
- ・ これらについては、海外の大学の取り組みなども参考に、Pros & Cons を分析し、Brush-up することも検討できるのではないか。

## 2. 新学年暦によって生み出される新たな学びについて

- ・ 学生が主体的に多様な学びに挑戦できる「余裕のある学年暦」のデザインが、「学生の成長を約束する」内部質保証の優れた設計として高く評価できる。これは社会の要請にも合致した学びの「戦略的な空白」ともいべき取組である。
- ・ また、経営学部の「企業調査実習」、国際観光学部の「地方での就業体験」、情報連携学部の「ハッカソンへの参加」など、新学年暦を有効活用する具体的な事例が生まれており、今後の展開が期待される。
- ・ こうした先進的な決定は、東洋大学の価値をさらに高め、差別化できる有効な取り組みと評価できる。
- ・ 一方、具体的な取り組み事例は、まだ一部にとどまっているため、今後多様な事例が集積されることを期待する。
- ・ 今後は、新たな学年暦で生み出された時間を、正課・課外に限らず、むしろ融合し、授業での学びだけでなく、ボランティアやインターンシップでの活動も評価に取り入れることを検討する、例えば、オープンバッジやマイクロレデンシャルとして認定するなど、大学外にも広げ、質を担保する仕組みの検討が必要ではないか。
- ・ また、オンラインとリアルの組み合わせは、科目や求める学習成果によって、多様性があってよく、特にオンラインによる授業や、録画による復習、AI を用いた質問への対応など、教員側の負担軽減につながり、かつ学びの質を保証し、さらに高めることができるよう、一部は試行錯誤しながら、知見を蓄積することが重要である。

## 総括

- ・ 教育 DX による学生の学びの個別最適化や進捗確認による質の保証の一方、教員が DX に関連するスキルを身に着け活用することで、効率的かつ質の高い学びを提供できることを実感することが、意識変革には何より重要と考える。
- ・ ベースとなる基盤は整いつつあり、明確な方向性も示されていることから、今取り組んでいくことを着実に実行する一方、定期的に成果を点検し、取り組み内容を取捨選択するなど、継続的な変革が求められることを共通認識として共有することも重要。
- ・ 先進的な取り組みが、東洋大学の価値の差別化につながり、学生のみならず企業からも注目されるよう、積極的に内外に広報を行うことも推奨する。

# 2025年度自己点検・評価活動及び 教育DX推進基本計画に関する報告書

2026年1月30日  
東洋大学大学評価統括本部  
東洋大学デジタル活用推進委員会

# 目次

---

第 1 章	内部質保証体制と教学中長期計画の関係	pp.4-12
第 2 章	中長期計画の進捗管理から見た内部質保証機能	pp.13-23
第 3 章	学習成果の可視化とエビデンスに基づく内部質保証機能	pp.24-32
第 4 章	教育 D X 推進基本計画の進捗	pp.33-55
参考資料・リンク集		pp.56-60

# 外部評価において、評価いただきたいこと

## 1. 内部質保証システムの実効性

- 東洋大学の内部質保証システムは、実質的に機能しているといえるか。
- 特に、教学中長期計画の推進プロセス（学長ヒアリングや提言の効果）は、学部・研究科・センター組織等の活動や成果を生み出すことに良い影響を与えているか。
- 学生の学習成果を適切に把握し、3ポリシーの実現に向けて活用できているか。

## 2. 教育DX推進基本計画の進捗

- 東洋大学教育DX推進基本計画の実行により、特に以下の3つは、学生主体の学び（Learning Journey）に繋がる特長ある取り組みとなっているか。
  - i. 「東洋大学公式アプリ」を活用した学びの羅針盤
  - ii. 「総合知」教育による学習者本位の教育（「総合知アプリ」による学びのデザインを含む）
  - iii. 新学年暦（13+2）によって生み出される多様な学び

# 第 1 章

## 内部質保証体制と教学中長期計画との関係

# 内部質保証に関する全学的方針

## ○内部質保証を推進するための**基本的な考え方**

1. 本学の建学の精神、目的及び各学部・研究科が掲げる教育目標等並びに諸活動の方針の実現に向け、教育研究をはじめとする大学の諸活動並びに組織及び運営について、自主的かつ自律的に自己点検・評価を行い、教学マネジメントのもとで、教育研究水準の向上に資する改革を推進する。
2. 全学における内部質保証の推進を担う組織（全学的内部質保証推進組織）は、大学評価統括本部とし、その下に学部及び研究科ごとの自己点検・評価活動推進委員会を統括する全学自己点検・評価活動推進委員会（以下、全学委員会）、その他の諸委員会、各部局の自己点検・評価体制との連携を図り、全学的な観点に基づき、必要な連絡調整及び提言（フィードバック）を行い、教育研究及び諸活動の企画、運営、検証、改善・向上の一連のプロセスの一層の充実を図る。
3. 自己点検・評価活動の実施にあたっては、自己点検・評価活動の客観性及び妥当性を高めるため、外部評価を行うよう努める。
4. 自己点検・評価活動をはじめとする内部質保証推進の状況について、社会的公表を行う。
5. 教育の質保証について、組織内の意識の醸成と涵養を図るとともに、学生の成長及び教育研究力の向上に資するよう、教職協働のもとで、学内の有機的な連携関係を形成する。

## ○内部質保証を推進するための**組織の権限・役割等**

1. 全学的内部質保証推進組織である大学評価統括本部の下に、学部・研究科ごとの自己点検・評価活動推進委員会を統括する全学委員会を置き、全学委員会の下に学部・研究科ごとの自己点検・評価活動推進委員会を組織し、自己点検・評価活動を推進する。
2. 学部・研究科ごとの自己点検・評価活動推進委員会は、教育目標、「卒業の認定及び学位授与に関する方針」、「教育課程の編成及び実施に関する方針」及び「入学者の受入れに関する方針」に基づく教育活動について自己点検・評価活動を組織的にを行い、その結果を全学委員会に報告する。
3. 全学委員会は、学部・研究科ごとの自己点検・評価の状況について相互評価（ピアレビュー）を行うとともに、大学評価統括本部に自己点検・評価結果を報告する。
4. その他の諸委員会及び各部局は、大学評価統括本部の下で、自己点検・評価活動を行い、その結果を大学評価統括本部へ報告する。
5. 大学評価統括本部は、全学的な観点に基づき、自己点検・評価活動を行った組織等に対して、提言（フィードバック）を行い、改善活動を促進する。また、学部及び研究科の自己点検・評価活動については、教学の自主的、自律的な内部質保証を推進する観点から、全学委員会から提言（フィードバック）を行うことを可能とする。

## ○内部質保証を推進するための**手続き・運用**

1. 全学的内部質保証推進組織である大学評価統括本部の業務、権限、その他運営に関しては、「東洋大学大学評価統括本部規程」に定める。
2. 学部・研究科ごとの自己点検・評価活動、その活動を統括する全学委員会の業務、権限、その他運営に関しては、「東洋大学自己点検・評価活動推進に関する規程」に定める。
3. その他の諸委員会及び各部局における自己点検・評価活動については、大学評価統括本部の下に、各部局と連絡調整を図り、相互評価を行うことを目的とした部会を設け、各組織の協力のもとに進める。
4. 評価基準については、大学設置基準及び大学院設置基準並びに大学基準協会が掲げる大学基準に基づく点検・評価項目等を考慮する。
5. 内部質保証推進体制については、関係組織と連携しながら、継続的、組織的に検証・改善を行い、最適化を図る。

- 理事会 / 常務理事会 学長が理事会・常務理事会の構成員として連携
- 法人教学連絡会 (法人教学連絡会)法人役員と教学執行部との連絡・調整

大学評価統括本部 【学長（本部長）、教学担当常務理事（副本部長）、副学長・常務理事・事務局長らで構成】 ※全学的内部質保証推進組織

外部評価の実施  
内部質保証体制

~Vision~  
▶ 建学の理念  
▶ TOYO GRAND DESIGN 2025-2029 (法人中期計画)

全学自己点検・評価活動推進委員会 ●委員長: 内部質保証担当副学長 ●委員: 各学部・研究科の自己点検・評価活動推進委員会委員長

- ◆ 専攻大学スタンダード (学士課程教育全体の教育目標)
- ◆ 教育DX推進基本計画
- ◆ 中長期計画Vision
- ◆ 教学基本方針 ◆ 教学予備編成方針
- ◆ 教育課程実施及び授業運営に係る全学方針
- ◆ カリキュラム改訂方針(4年サイクル)
- ◆ 3つのポリシーの改訂に係る基本方針・手続き
- ◆ 学修成果測定指標に係る基本方針
- ◆ 予算編成ヒアリング
- ◆ 中長期計画連携ヒアリング
- ◆ 人事計画ヒアリング

各学部・研究科自己点検・評価活動推進委員会

- 自己点検・評価活動に係る方針の策定
- 外部評価の計画・立案

直接的または間接的な支援

学生

【学修】  
▶ 履修計画の立案  
▶ FDS/SD計画・実施  
▶ 授業評価アンケートの実施  
▶ 成績・単位取得状況の確認  
▶ リメディアル教育の受講

【課外活動】  
▶ ボランティア活動、就職活動、サークル活動等  
▶ 授業評価アンケート

【質保証への関与】  
▶ 授業評価アンケート  
▶ 新入生 / 在学生 / 卒業生アンケートの実施・分析

【質保証への関与】  
▶ 学生FDチームによる活動  
▶ 優秀教育活動アンケート

学部長会議 / 研究科長会議

教授会 / 研究科委員会

人材養成の目的・教育目標

APの策定

入試実施

入試方式の検証 / 定員管理

入試方式の再策定

中長期的サイクル 中長期計画の立案・実施・検証

【学部】

- ▶ 教員による履修指導、オフィスアワー
- ▶ クラス担任制度などによる学修・生活指導
- ▶ 就職・進路指導
- ▶ FD活動
- ▶ 学部・学科運営に係る諸業務

【研究科】

- ▶ 大学院生・研究指導
- ▶ 論文指導
- ▶ 研究者・高度職業人のキャリア支援
- ▶ FD活動
- ▶ 研究科・専攻運営に係る諸業務

【研究活動】

- ▶ 論文執筆・研究発表など研究成果の社会還元

全学委員会部会 ●部会長: 学長 ●部会員: 全学の各委員会の委員長

- 学生支援 / 就職・キャリア支援 / 社会貢献 / 研究等に係る内部質保証
- 学生生活委員会 ▶ 学生の福利厚生、育英奨学、課外活動に関する立案・実施・検証
- 就職・キャリア支援委員会 ▶ 就職・キャリア支援の全学的な方針、進路支援の立案と調査・検証
- 図書館運営委員会 ▶ 図書館資料、データベース等の管理の基本方針、計画・実施
- 社会貢献センター運営委員会 ▶ 社会貢献プログラムの基本方針、公認機関の育成、広報戦略、情報戦略
- 教職センター ▶ 教職課程の方針の策定、教員養成に係る教育研究 ▶ 教職課程履修者の支援及び指導
- ラーニングサポートセンター運営委員会 ▶ 基礎学力向上に係る支援 ▶ 論文作成の基礎的スキル等の修得支援
- 国際教育センター運営委員会 ▶ 国際学生に対する教育支援 ▶ 外国語力強化プログラムの実施
- 井上門下哲学センター ▶ 創立者井上門下の理念継承に係る教育(自教教育)の展開
- 情報化推進委員会 ▶ 情報化戦略、大学における情報管理推進の企画の立案、運営、評価
- 学術研究推進委員会 ▶ 研究力強化、研究高度化、研究活動の国際化のための中長期計画の策定
- 産官学連携推進本部 ▶ 産官学連携に関する基本方針の策定・推進 ▶ 教員及び学生の産官学連携支援
- TOYOスポーツセンター ▶ スポーツ振興の推進 ▶ スポーツ連動型の総合的統括
- SDG推進センター ▶ SDG活動の全学的推進 ▶ SDG研究成果の社会的還元

大学運営・財務部会 ●部会長: 事務局長 ●部会員: 事務局部長

- 経営企画本部事務局 ▶ キャンパス計画、学部・研究科設置・改組
- 総務部 / 秘書室 ▶ 学校法人の総務、組織管理
- 人事部 ▶ 法人職員の人事計画
- 経理部 ▶ 予算方針、編成、執行管理
- 管財部 ▶ 財政計画、資産運用
- 内部監査室 ▶ 施設・設備充実に関する計画

教育に係る内部質保証 (3つのポリシーを起点とするPDCAサイクル)

教職協働

大学運営・財務に係る内部質保証

内部質保証のポイント

■ 全学的内部質保証推進体制  
学長を本部長とする「大学評価統括本部」が**教学と法人が一体**となったガバナンス

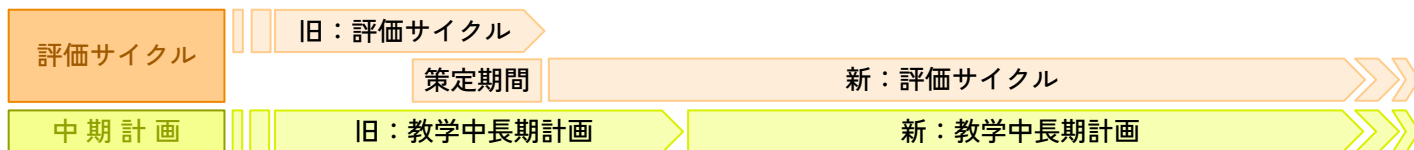
■ 学生を中心に据えた質保証  
・全95組織(学部・研究科・センター等)が3ポリシーや中長期計画等に基づき、**自律的にPDCAサイクル**を回す

・各組織の自己点検・評価結果を「大学評価統括本部」に集約。本部長(学長)は、中長期計画の推進や教育研究活動のさらなる充実を目指し、全学的な観点から「**全体最適**」をもたらす提言を行う

・学長ヒアリング(年3回)を実施。各組織と「**成果につながる本質的な問い**」を投げかけ合う**建設的な対話**を丁寧に重ねることで、**形式的な報告に留まらない、実効性ある検証と改善**を繰り返している

# 評価サイクルと諸施策との関係

2028年度に第4期機関別認証評価（大学基準協会）を受審予定である。これに向け、法人・教学の各計画との整合性を下記のロードマップのとおり整理し、受審に備えている。



自己点検・評価	2021	2022	2023	2024	2025	2026	2027	2028
学部・研究科	認証 評価	・中期計画の策定・運用、ローリング ・3P・カリキュラム・教員組織等の評価 <small>（学部・研究科のみ）</small>				・認証評価準備		認証 評価
全学委員会部会		・大学運営及び財務に係る評価						
大学運営・財務部会		○	○	○	○	○	○	
外部評価								

【参考】大学施策等		2021	2022	2023	2024	2025	2026	2027	2028
認証評価		受審	—	—	—	改善報告	—	—	受審
法人中期計画 TOYO GRAND DESIGN		TGD 2020-2024				TGD 2025-2029			
教学中長期計画	長期計画	2017-2023			中長期計画 2024-2028				
	中期計画	2020-2023							
	短期計画	短期	短期	短期					
カリキュラム		2021カリキュラム				2025カリキュラム			
キャンパス移転・ 組織再編	赤羽台C 2学部5学科開設	—	—	改組（完成年度）				—	—
	朝霞C 学部改組・移転	—	—	改組（完成年度）				—	—
	川越C 新学部開設、改編等	—	—	—	—	—	—	改組	

# 150周年を見据えた教学中長期計画の基本方針

## 未来を哲学する、東洋大学

哲学し、科学する力が地球社会の未来をつくる  
ダイバーシティが連携を生み、協働が改革を支える

※2024年度より教学中長期計画として計画期間を下記の通り定義した。

長期計画：2024～2033年度

中期計画(前期)：2024～2028年度

中期計画(後期)：2029～2033年度

1

3万人のLearning Journeyを支える新しい教育の姿（かたち）の創造

学生一人ひとりが物事の本質に迫って深く考察し、哲学する学びの旅を続ける力をつける。

2

多様な学生の課外活動及びキャリア形成への支援

多様な個性を活かしてキャリアを展望し、柔軟に社会で活躍できる学生を育成する。

3

SGU×SDGsによる国際教育の推進

SGUで培った知識・経験を基に、国際的課題の解決に参画できる学生を育てる。

4

ブランドとなりうる連携・共同研究を促進

研究により新しい価値を生み出し、社会的課題解決に貢献することで、東洋大学のブランド力を高める

5

特色あるリカレント教育の推進と社会貢献活動の拡大

多様な方法で学び直すことができる東洋大学リカレント教育モデルを創る

6

多様性ある教員組織の拡充と教職協働の強化

総合大学としての多様性を強みとして、教職協働により人類の幸福のために奮闘する伝統を堅持する。

# PDCAサイクルを一体化する本学独自の評価シートの活用

従来、散在していた関連書式（中長期計画書、自己点検・評価報告書、FD計画書等）を2024年度よりGoogleスプレッドシートに集約。これにより、3ポリシーを起点とするPDCAサイクルが一貫性を持って機能するよう刷新した。（14学部48学科、15研究科36専攻、全学センター11組織の計95組織が策定）

## Plan/Do

### 中期計画の進捗管理：

目標・具体的方策・評価指標・ロードマップを明確化

①基本方針1		3万人のLearning Journeyを支える新しい教育の姿の創出														
目標		学生一人一人が物事の本質に迫って深く考察し、哲学する学びの旅を続ける力をつける。														
②具体的方策		③中期計画の概要		④中期目標		⑤教育力強化特別施策				⑥ロードマップ						
						2024		2025		2026		2027		2028		
1	大人数教育から少人数教育による対話型、議論型教育へ展開	ゼミ教育の充実		2025年カリキュラムでの、4年次のゼミ履修率の向上。		有		20カリキュラムでの授業検討		同左		同左		効果測定		
	2 学修成果指標の活用による教育内容の高度化と学生一人ひとりへの学業支援体制の強化	資格取得プログラムにおける学外実習等の充実		TOEIC受験・語学検定試験受験の促進とその評価。		無		目標と施策の検討		授業実施（各種アンケートシステムでTOEIC受講生に授業内容の振り返り）		効果測定と目標・施策見直し		同左		
	3	学修成果・成績状況を踏まえた学習指導方法の充実（各種データ活用含む）		経済学部取組データベースを活用したカリキュラムの検討		2016年・2021年カリキュラムの検討		無		2016年カリキュラムを基にした整理		同左		2021年カリキュラムを基にした整理		同左
全学共通																

## Check

### カリキュラム点検・評価：

カリキュラム点検・評価を同シート内で行い、中期計画の履行と3ポリシーに基づく点検評価をセットにして進捗管理

### カリキュラム点検・評価 3つのポリシー

評価項目	2023	2024
OPPIにおいて、学生が身に付けるべき資質・能力等の学修成果の目標を明確にしているか。	OPPIに別化した「授業配習やカリキュラムマップは適正に策定されているが、学生が学修成果の目標を明確にして履修するためにコース制の導入など変更に向けたカリキュラムの再編成は進められていない。また、各学年に「工学」に該当する単位の履修が必要である。そのような機会を国際経済領域で設ける予定である。	学生が学修成果「目標をより明確に把握するために履修成果の目標を明確にして履修するためにコース制を導入した。コース内に位置づけられた履修目標を中心に履修していること、履修したコースの履修目標を体系的に把握することが期待できる。コース単位に向けた導入教育については、初年次教育にて学修機会を設けている。
OPPIにおいて、学修成果を達成するために必要な教育課程及び教育・学習の方法を明確にしているか。	学生の履修状況についてのチェック体制が十分であるため、上級生によるピアラーニング/ハイパー制の導入を促進するための導入に成功している。この「学修成果」は、ハイパー制の導入について「履修目標を達成するために」決定している。	右記の課題を踏まえて、前年度からの学年次教育での上級生によるピアリング/ハイパー制の導入を促進するための導入に成功している。この「学修成果」は、ハイパー制の導入について「履修目標を達成するために」決定している。
OPPIにおいて、入学前の学習歴、学力水準、能力等の求める学生層や、入学後目指すに求める水準等の判定方法を明確にする等が、明確にされているか。	入学試験の結果を見ると、外製試験の結果を利用した入試の入学試験の厳格化が十分確認されている。入学後については、学生の学修成果は高いが、履修した学修のために必要な学修力や能力が不足しているため、入学後目標を設定し、履修目標を明確にしている。	別項目にあるデータサイエンス系の学びの促進も考慮して、数学科の入学試験方法を再評価している。12月に履修した学修成果は高いが、履修した学修のために必要な学修力や能力が不足しているため、入学後目標を設定し、履修目標を明確にしている。

## Action/Feedback

### 学長からの提言：

学長からの提言を同シート内を示し、計画の推進力を高める

### 学長からの提言（フィードバック）

※提言（フィードバック）について、組織間で共有し、次年度の計画等に活かす

項目	2022
学長からのフィードバックコメント（提言） ※記載不要です。	<p>・2023年5月以降、コロナによる行動制限の解除により、学生が主体的にさまざまなフィールドで活動することが期待されます。また、学生の成長に資するよう、教員との対話、学生同士の対話が創出される教育活動の実践をお願いいたします。</p> <p>・2025カリキュラム改訂に向けた検討をいただいておりますが、カリキュラム改訂を待たずして、新中期計画の方針「教育DX推進基本計画」に描いたオン・オフキャンパスを活用した教育」にあるとおり、教育効果の高いオンデマンド授業を採り入れるなど、多様な学習形態の創出を目指してください。</p>

### 【刷新による成果】

- ・ 記述内容の大幅削減と要点の明確化
- ・ 進捗管理と情報共有の効率化
- ・ 実質的な改善活動に注力する仕組み

# 「対話」による質的評価と「教育投資」による改革推進

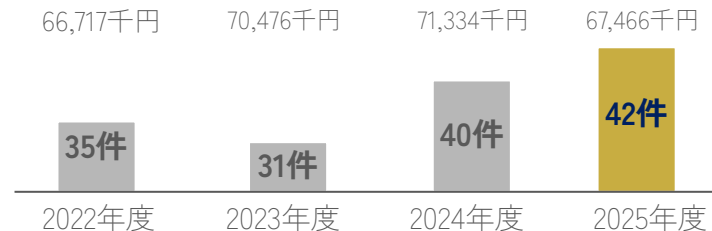
学長ヒアリングによる”学部等との徹底した対話”



全95組織  
約170時間

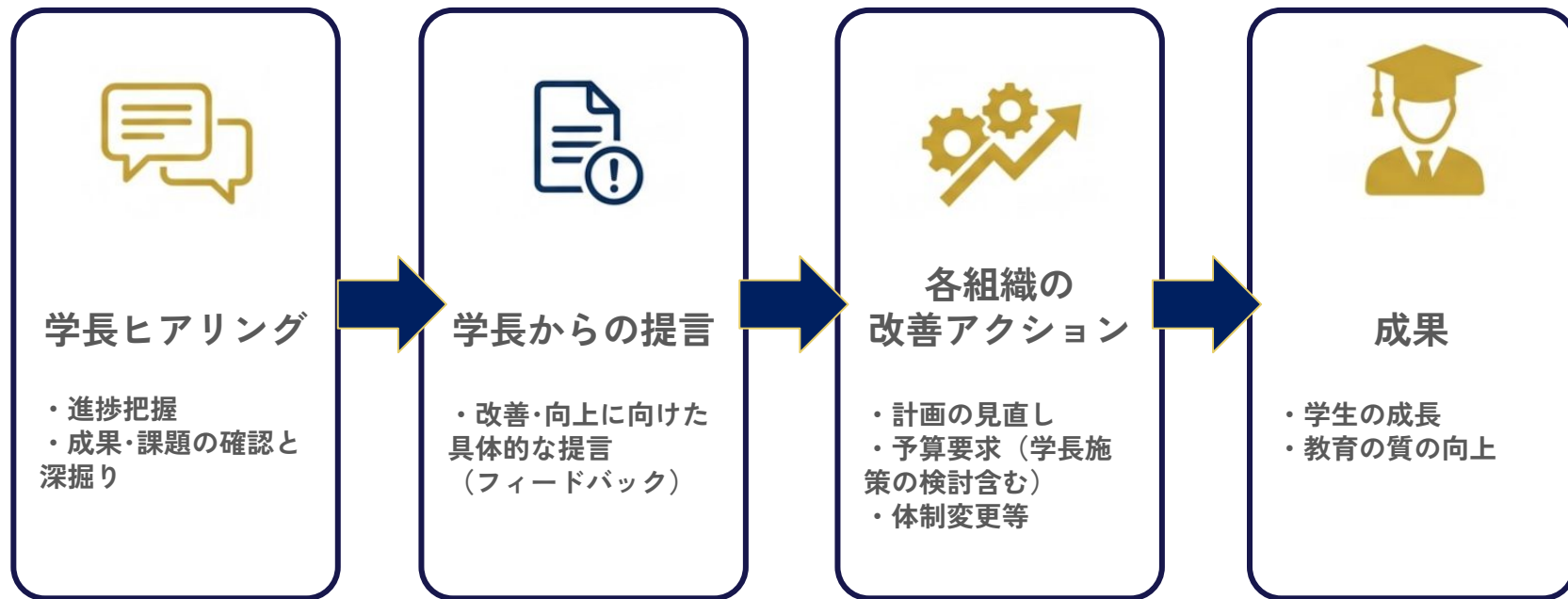
- ・学長ヒアリングとして計画の相互理解や妥当性確認のため、準備も含め**170時間以上を費やし、徹底した対話にこだわった**。学部長、学科長、各学部の自己点検・評価活動推進委員長、関係事務局との目線合わせを行い、計画の可能性、進捗、課題点を深く掘り下げた。
- ・**現状把握に留まらず**、教学基本方針、目標の相互理解を促進し、計画の上方修正やロードマップの精緻化を行う、**重要なコミュニケーションの機会**としている。

教育力強化特別予算（学長施策）による支援



- ・中長期計画の推進に資する、学部、学科、センター組織の**意欲的・独創的なプロジェクト**を特別予算で支援。
- ・2025年度実績：採択件数42件/採択額：67,466千円
- ・**主な支援例**
  - ① **経済学部**：国際経済学科ゼミナールにおけるグローバル人材基礎力強化
  - ② **国際観光学部**：国際観光プランニングコンテスト
  - ③ **就職・キャリア支援部**：哲学教育とインターンシップ

# 建設的な対話による質保証のサイクル



第2章では、このサイクルが実際に機能した事例、進捗が芳しくない事例を紹介する。

# 内部質保証体制にかかる現状認識

- 学生を中心に据えた内部質保証を推進するために、「[内部質保証に関する全学的方針](#)」その他全学的方針を定め、毎年、教学全組織に示している。
- 学部では4年周期のカリキュラム改訂にあわせ、3ポリシーの見直しを図るとともに、学部・研究科・全学センター組織の計95組織が毎年自己点検・評価活動を実施している。
- 教学による中長期計画を教学改革の原動力として捉え、計画の進捗管理と3ポリシー・カリキュラム点検等の評価をあわせて、自己点検・評価活動として位置付け、フォーマットの工夫を図り、最適化と効率化を図っている。
- 各組織の評価結果に対して、大学評価統括本部長（学長）は学長ヒアリング（中長期計画の進捗把握/予算/人事の年3回）を行うとともに、各組織に「提言」を付すことでさらなる高度化や改善を促している。



上記の定形的なサイクルを毎年循環させ、相応の時間をかけているものの、「成果があがっているか（いないか）」を踏まえ、内部質保証体制やその機能において、どのような見直しが必要かという検証が十分にはできていない。

# 第2章

## 中長期計画の進捗管理からみた内部質保証機能

(提言やヒアリング、その他制度が機能しているか。)

# 中長期計画のロードマップ・評価指標・目標の設定について

- 各組織の中長期計画における目標設定、ロードマップ、評価指標、年度目標・実績等の管理は、各組織の自主性を促すため、以下の通りとしている。
- なお、評価指標について定性的・定量的の評価指標のどちらを用いるかは、計画の特性を考慮し、学部学科等の組織の主体的な判断に委ねている。  
※各組織の「中長期計画&評価シート」はこちらよりご参照ください。

中期目標	学生にどのような成長をもたらすかを軸に、当該計画の具体的な目標を設定すること
ロードマップ	年次でどのような活動をしていくのか、可能な限り具体的に記入すること
評価指標	学生にどのような成長をもたらすかを軸に、できる限り評価しやすい指標を設定し、目標の達成状況や成果の把握に活用すること
年度目標・実績	上記評価指標に対する目標を年度ごとに設定し、毎年実績を確認すること。
評価	毎年度末に進捗状況を把握するとともに、学長ヒアリングや学長からの提言を踏まえ、ローリングや計画の見直しをすること

# 具体的な計画の把握状況①

## ● 学部学科の中長期計画【達成度の高い計画】

文学部教育学科  
人間発達専攻

計画の概要：3万人のLearning Journeyを支える新しい教育の姿の創造

### 【計画項目】

- ・学修成果・成績状況を踏まえた学習指導の充実。
- ・単位僅少者面談の実施
- ・長期欠席者と丁寧な学生指導により退学・原級の未然防止



### 【学長ヒアリング・提言内容】

- ・コロナによる行動制限解除により、学生の主体的な活動を期待し、学生の成長に資するよう、教員との対話、学生同士の対話が創出されるように教育活動を実践するよう。



### 【成果・結果・課題点】

- ・連絡がついた学生への単位僅少者面談の実施率 **目標80% → 実績100%**
- ・計画項目の達成状況は順調であり、以降も本件への取組みは勢いを維持する。
- ・対象者に対し、所定の期間以外にも時間を設定して対応し、全員に面接を実施する事ができた。

国際学部グローバル  
イノベーション学科

計画の概要：3万人のLearning Journeyを支える新しい教育の姿の創造

### 【計画項目】

- ・教育DX推進基本計画に描いたオンキャンパス・オフキャンパスを活用した教育
- ・対面授業においてオンライン授業とオンデマンド授業を組み合わせ、対面授業回数削減のための試行



### 【学長ヒアリング・提言内容】

- ・教育における国際色の豊かさは維持しながらも、学生一人ひとりの力を更に伸ばすことができるよう、学生の国際性と自主性を尊重しながら、教育上の企画を実施するよう。



### 【成果・結果・課題点】

- ・目標：試行科目数 **1科目**  
実績：試行科目数 **3科目**
- ・2026年度より新たに全学的に導入する**13+2制度**の先駆的取組みとして、早期から施行実施することができた。

# 具体的な計画の把握状況②

## ● 学部学科の中長期計画【達成度の高い計画】

経済学部経済学科

計画の概要：3万人のLearning Journeyを支える新しい教育の姿の創造

### 【計画項目】

・学習成績指標や成績状況に基づき、学科独自のサポートデスク等の対面あるいは非対面での指導期秋を提供する。

対象学生に面接指導機会を確実に提供する。Eラーニングも積極的に活用する。



### 【学長ヒアリング・提言内容】

・より多くの学生が少人数教育の恩恵を受けられるよう工夫し、成績不審者に対するサポートを積極的に展開し、学内の好事例となる様に。

・経済学部らしい、定量的かつ具体的なアウトカム指標を設定するように。



### 【成果・結果・課題点】

・**目標250名 → 実績402名 達成率160%**

・達成率は非常に高いが、学部が独自に運営する学修支援体制を利用した学生を計上するに留まっているため、その後の成績変化について検証できるように期待したい。

経済学部国際経済学科

計画の概要：SGU×SDGsによる国際教育の推進

### 【計画項目】

・学部学科ごとの特徴ある国際教育の展開

・学科所属学生に対する留学セミナーや海外研修の実施



### 【学長ヒアリング・提言内容】

・各組織の施策においては事業継続性を考慮し、特定の人物に固定化せぬよう「属人化しない仕組み」として制度設計する様に。また、海外研修は高額となるため、学生負担を考慮する様に。



### 【成果・結果・課題点】

・**学長ヒアリングにおいて「業務の属人化」と海外研修における学生負担を軽減するため、研修先をローテーションに。**

・米国、中国、欧州、アジアを中心とし、アジアは毎年新たな国を選定する計画が見られる。

# 具体的な計画の把握状況③

## ● 学部学科の中長期計画【達成度の高い計画】

理工学部機械工学科

計画の概要：3万人のLearning Journeyを支える新しい教育の姿の創造

### 【計画項目】

・デジタル技術+機械工学の理念を念頭に牽引力のある優秀な技術者となる学生を育成するための実習科目の実施



### 【学長ヒアリング・提言内容】

・学生の学びの質保証を軸に、他キャンパスの先行事例を参考にすることに。  
・履修者が多い授業=学生のニーズがあると理解できるので、コース数を増やすことで多くの学生に受講の機会を提供すること。



### 【成果・結果・課題点】

・**目標40名 → 実績63名 達成率158%**  
・達成率が約1.5倍を上回り、目標は達成している。  
・教材の都合上、履修者制限を行っている。授業開講上の都合で上限数一杯まで学生を受け入れている。

生命科学部生体医工学科

計画の概要：3万人のLearning Journeyを支える新しい教育の姿の創造

### 【計画項目】

・資格取得プログラムにおける学外実習等の充実  
・**第2種ME検定**、ITパスポート、基本情報処理技術者、統計検定2級等の諸資格の取得者数の増加



### 【学長ヒアリング・提言内容】

・資格取得支援について学生支援策を充実させるように。  
・また、同項目については**学長施策**へのエントリー（格上げ）も検討する様に。



### 【成果・結果・課題点】

・**目標5名 → 実績18名 達成率360%**  
・実績値が目標値を大きく上回っており、高い達成率となっている。理系学部における資格取得の重要性について数値結果を残している。他の資格等の展開を期待したい。

# 具体的な計画の把握状況④

## ● 学部学科の中長期計画【達成度の低い計画】

文学部教育学科  
人間発達専攻

計画の概要：3万人のLearning Journeyを支える新しい教育の姿の創造

### 【計画項目】

- ・資格取得プログラムにおける学外実習等の充実
- ・特別支援学校往還型教育実習の実習助手等を雇用し、対外的交渉や学生指導における現場との往還を強化する。



### 【学長ヒアリング・提言内容】

- ・学生の主体的な活動により、学生の成長に資するよう、教員との対話が創出されるように。
- ・学長ヒアリングを受け、ロードマップ等の評価指標を丁寧に設計する様に。



### 【成果・結果・課題点】

- ・**実績値未設定（進捗＝「遅れ気味」）**
- ・特別支援学校往還型教育実習における助手を採用しようと学部執行部と協議したところ、規則の改正が必要であることが判明し、その後、当該規則を改正するような動きは見られていない。

理工学部建築学科

計画の概要：計画の概要：3万人のLearning Journeyを支える新しい教育の姿の創造

### 【計画項目】

- ・大人数教育から少人数教育による対話型、議論型教育へ展開
- ・少人数教育が達成できていない授業科目において適正な人数での授業運営を行う（受講生数150名以下に）。



### 【学長ヒアリング・提言内容】

- ・学生の学びの質保証を軸に、先行して改革が進む他キャンパスの先行事例を参考に川越キャンパス全体の在り方を検討すること。学長ヒアリングを基に目標、評価指標を精緻化・具体化すること。



### 【成果・結果・課題点】

- ・**目標10% → 実績0% 達成率=0%**
- ・150名以上の授業において受講人数を分散させるため、非常勤講師の採用を試みるが、教室数の関係もある、教室棟の新設の予定はあるが、ハードだけでなくカリキュラム運用に係る制度等の見直しを期待したい。

# 具体的な計画の把握状況⑤

## ● 学部学科の中長期計画【達成度の低い計画】

食環境科学部健康栄養学科

計画の概要：3万人のLearning Journeyを支える新しい教育の姿の創造

### 【計画項目】

- ・管理栄養士養成校として管理栄養士養成を実施しているため、国家試験の合格率向上のための学習指導方法を充実指させる。
- ・管理栄養士国家試験合格率の向上



### 【学長ヒアリング・提言内容】

- ・学修成果の把握の一環として、管理栄養士試験の合格率を用いると共に、管理栄養士試験の合格とその後の進路を踏まえ、4年間の過ごし方と学生指導の充実について丁寧に検討し具体化すること。



### 【成果・結果・課題点】

- ・**目標：全国平均以上**  
**実績：全国平均以下**（進捗＝「遅れ気味」）
- ・全国平均を下回っており、2024年に新設した朝霞キャンパスの学科であるが、指導する教員の充実のほか、具体的方策は見えていない。

総合情報学部総合情報学科

計画の概要：SGU×SDGsによる国際教育の推進

### 【計画項目】

- ・独自のSDGs活動の実践
- ・SDGsアンバサダー登録の働きかけを行う。留学生アンバサダーの積極的受入れを行う。



### 【学長ヒアリング・提言内容】

- ・学生の成果に何をもちたらずかを重視し、目標、評価指標、ロードマップを修正するように。
- ・学内の各センター組織と特に連携して進める様に。



### 【成果・結果・課題点】

- ・**目標：SDGsアンバサダーへの登録 10名**  
**SDGsイベントへの参加人数 3名**  
**実績：登録、参加共に0名**
- ・実績0であり、制度周知不足に留まっており、改善方策を見いだせていない。

# 具体的な計画の把握状況⑥

## ● 学部学科の中長期計画【達成度の低い計画】

食環境科学部フードデータ  
サイエンス学科

計画の概要：3万人のLearning Journeyを支える新しい教育の姿の創造

### 【計画項目】

- ・学修成果や成績を踏まえた学修指導の充実（データ活用を含む）
- ・学生ポートフォリオを活用した個別指導を行う。
- ・学生の単位取得状況およびGPAを把握し、不得意分野の単位修得を促す。



### 【学長ヒアリング・提言内容】

- ・1クラス10名程度という少人数教育の設計について、準備・コース運営の効率化を図る様に。
- ・学修成果測定指標の設計と活用は高等教育推進センターと連携し、キャリア展望とセットで学修指導にあたるように。
- ・学科独自の施策（食堂プロジェクト）ではデータ分析を積極的に取り入れ、正課授業との連動性を考慮したうえで体系的な学習プログラムの一環となる様に運営すること。



### 【成果・結果・課題点】

- ・**目標：無（評価指標の検討に留まる）**  
**進捗＝「遅れ気味」**
- ・学生のゼミ配属にGPAを利用する等、学修成果の数値の利用は行っているが、学生ポートフォリオの活用や、学修成果の分析結果を用いた、学生指導は実施できていない。

### 【計画項目】

- ・教育DX推進基本計画に描いたオン、オフキャンパスを活用した教育。
- ・新設学科（2024）として完成年度に向けて各科目の教育効果測定を行う。



- ・入試状況を客観的に捉え、入試改革に係る独自計画を策定すること。



### 【成果・結果・課題点】

- ・**目標：無（評価指標の検討に留まる）**  
**進捗＝「遅れ気味」**
- ・学生の満足度調査のためのフォーマットを作成して調査を実施する、としているがその後のアクションには至っていない。
- ・入試状況を考慮した改革が進んでいない。

# 具体的な計画の把握状況⑦

## ● 学長施策（教育力強化特別予算）【達成度の高い計画】

社会学部メディアコミュニケーション学科

計画の概要：[産学連携によるメディアコンテンツ政策・発信プロジェクト](#)

### 【計画項目】

・2024年度までの「最新メディア体感プロジェクト」の実績の拡大発展版。「講義」「実技」「体験型プログラム」を連動させ教育効果を発揮させ学外へ発信。



### 【学長ヒアリング・提言内容】

・学生の主体的な活動がなされるように、学生の成長に資するよう、対話が創出されるように教育活動を実践するように。  
・学生に何をもたらすかを軸に計画等の進捗を評価すること。



### 【成果・結果・課題点】

・**目標：履修登録者数 10名**  
・**実績：履修登録者数 80名 達成率：800%**  
・応募者数が予定人数を大幅に超過したため、3コース80名体制で運営する。今後は学生の製作物の「質」に拘った評価を取り入れる事を検討。

生命科学部  
[学部共通]

計画の概要：[持続可能な未来社会を築くSDGs活動を促進する学生リーダー育成イニシアティブ](#)

### 【計画項目】

・SDGs活動による地域貢献  
・国際的SDGs活動への参加  
・地域のニーズを調査し、地域のSDGs活動に貢献する。  
・年度横断的な持続可能なSDGs活動を実現する。



### 【学長ヒアリング・提言内容】

・企画の認知度向上や参加者数増加のための広報に工夫が必要なのは明らかだが、学生を導いていく仕組みについては熟考が必要。  
・ターゲットとなる学生層を見定め、その層にアプローチするように。



### 【成果・結果・課題点】

・**目標：SDGs活動件数 3件**  
・**実績：SDGs活動件数 5件 達成率：167%**  
・[東洋朝霞共創リーダーズ](#)の地域連携による5件の活動もSDGs活動と位置付けている。  
・達成率が高く、次年度以降の目標値の上方修正が期待される。

# 具体的な計画の把握状況⑧

## ● 学長施策（教育力強化特別予算）【達成度の低い計画】

法学部法律学科

計画の概要：各種資格試験対策講座の拡充

### 【計画項目】

- ・各種資格試験対策講座の拡充
- ・司法書士、行政書士、宅建、社労士等の対策講座を学生のニーズに合わせて開講する。



### 【学長ヒアリング・提言内容】

- ・難関資格合格に向けた学生のモチベーションアップのための仕組みづくりについて、学部で考える支援策等について熟考するように。
- ・学生に何をもたらすかを軸に計画等の進捗を評価すること。



### 【成果・結果・課題点】

- ・ **目標：開講したかどうか**  
**実績：準備のための議論のみに留まった**
- ・目標があいまいなため、進捗把握が困難。外部企業に委託しての講座であるため、教員の関与、学部としての教育効果が測定が難しい。

健康スポーツ科学部  
健康スポーツ科学科

計画の概要：「東洋大学健康スポーツ科学科アルバルクカレッジ（仮）」の開催

### 【計画項目】

- ・授業科目において、バスケットボールチームのアルバルク東京と提携し、プロスポーツクラブの運営全般について実践的に学ぶ。
- ・スポーツ経営を実践的側面から学習し学生のキャリア指導の一環とする。



### 【学長ヒアリング・提言内容】

- ・自治体や地域との連携を通じた活動を展開し、東洋大学全体の理解に繋がるような活動を期待する。
- ・学生への細やかな学習指導が実施されるよう、組織的に取り組むこと。



### 【成果・結果・課題点】

- ・ **目標：計画・実施**  
**実績：計画・申請**  
**進捗＝順調、次年度方針＝現行を維持**
- ・目標の設定にはほど遠く、大幅な考え方と企画の再設計を要する。→計画変更となりました。

# 中長期計画の進捗管理における現状認識

- 評価指標の策定については、各学問分野や計画の特性を考慮し、定性的/定量的指標の選択は、学部・学科等の主体的な判断に委ねている。評価指標の設定状況の例は、以下のとおりである。
- 計画の初年度(2024年度)に実施した学長ヒアリングでは、策定された中期計画が「学生の成長」「組織の成長」に直結しているかを主眼に置き、目標や評価指標の妥当性を重点的に確認した。この対話を通じて、学長から具体的な改善提言を行い、各組織に対して計画の見直しを促した。

	定性的評価指標（主に制度や仕組みづくりの計画）	定量的評価指標（具体的なアクションがある計画）
具体的	<ul style="list-style-type: none"><li>・対話型、議論型教育のための教員のスキル向上</li><li>・学生が主体的にルーブリックを活用して、自己の学びを評価できる</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・ゼミ履修率</li><li>・教職希望者受講率</li><li>・プログラム履修者数</li><li>・2年終了時と4年終了時のTOEICスコア</li><li>・先行履修制度利用学生数</li><li>・外部資金獲得数</li></ul>
あいまい	<ul style="list-style-type: none"><li>・実際に開講したか</li><li>・実際に見直しが行われたか</li><li>・検討の実施</li><li>・実施方法、内容の決定</li><li>・該当者の困難の明確化</li><li>・運営体制の構築</li><li>・可能な限り実施</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・多様性に配慮した採用実施数</li><li>・インターンのニーズの把握調査実施回数</li><li>・認識不足件数</li><li>・会議での呼びかけ回数</li><li>・1件以上</li><li>・会議数</li><li>・検討数</li></ul>

- 現状の評価指標（KPI）は「学生の成長」に繋がっているかを把握する指標となっていない。このことは、本学が目指す、学生を中心に据えた内部質保証が機能しているかという点において、課題であると認識している。
- 中長期計画の中間評価を見据え、評価の焦点を「活動したかどうか」ではなく、「教育インパクト(学習成果)」へと移行し、あわせて学長からの提言についても、より具体的な成果を問う形式へと転換を図る。
- 一方で、各組織の自律的なマネジメントを促す観点から、学長の提言のみに依存しない(トップダウンになりすぎない)仕組みを構築したいが、具体的な方法（インセンティブや組織的な動機付けの手法等）については、今後検討していく必要がある。

# 第3章

## 学習成果の可視化とエビデンスに基づく内部質保証機能

(学生の成長を捉える仕組みは有効に機能しているか。)

- ①学修成果測定指標の活用
- ②TOYO date portallによる教学データ提供とオーダーメイドでのデータリクエスト分析
- ③中長期計画の進捗管理以外の自己点検・評価
- ④各学部等における外部評価の実施

# 学修成果の測定に関する基本方針

## ●学修成果の測定に関する基本方針

ディプロマ・ポリシーに示した各項目の達成状況を測定することを基本とし、授業科目の成績評価(以下、グレード・ポイント)及び全学的に実施している学生の資質、能力等を測定している指標や学科等の独自の測定指標を用いることで、総合的、多面的に評価するものとする。

### (ア) 授業科目のグレード・ポイントを用いる

カリキュラムを構成する授業科目と学修成果の関連性を検証するため、学修成果測定指標には各授業科目のグレード・ポイントを用いることを基本とする。測定に際しては、ディプロマ・ポリシーに求める能力要素と授業科目との関係性を示す対応表を各学科等において作成し、それに基づいてグレード・ポイントを集計する。

### (イ) グレード・ポイント以外の全学で測定している指標を用いる

学科等の判断でTOEIC等の英語のプレイスメントテスト、学生アンケート、PROGテスト等を活用し、グレード・ポイント以外の測定指標を加える。

### (ウ) 学問分野に即した独自の測定指標を用いる

学科等の判断で、全学で実施している測定指標以外に、より学問分野に即した独自の測定指標を用いる。卒業研究(論文)等のルーブリック評価の結果や、学科等が独自に開発する卒業認定試験、進級テストのほか、学修成果の獲得に関連する外部試験のスコア、その他資格の合格、留学実績やインターンシップ実績、TGLポイント等、学科等の判断においてさまざまな測定指標を組み合わせ、学問分野の特性を活かした多面的な測定指標を用いる。

### (エ) 学科等や学生個人が学修成果の測定結果を総合的に把握できるようにする。

(ア)～(イ)による測定結果は、表、グラフ等を活用して総合的に示す。

基本方針に基づき、学修成果測定指標は下記の3つの指標で構成

1 授業科目の成績 (グレード・ポイント)

2 全学で実施・測定している指標

3 学問分野に即した学科等の独自指標

※各指標はDPの各項目に対応する

# 学修成果測定指標の活用①

- 各学科が策定したディプロマ・ポリシーに基づく学修成果測定指標を可視化するため、2021年度より専用システムを導入。これにより、DP達成状況や各指標の推移、学年・入試種別ごとのGPA分布状況等を定量的に把握・分析することが可能となっている。
- 各学科では、毎年の自己点検・評価活動の一環として、可視化されたデータの把握と検証機会を設けている。分析結果をカリキュラム検討、授業科目や教育手法の見直し、成績評価の妥当性検証など、学習成果の把握と活用をFDと位置付けて実効性を高めている。
- なお、大学院においては学部の運用方針を踏まえつつ、専攻及び課程の専門性や特性に応じた独自指標を策定し、授業科目及び研究指導の改善等に活かすこととしている。



# 学修成果測定指標の活用②

- 2022年度より、学生が自身の学修状況をリアルタイムで把握できるよう、公式アプリを通じて「GPA推移」「学科内GPAポジション」「DP達成状況」の可視化を実現した。
- 学期ごとの成績発表時に、学生自らが学修成果を確認することで、自身の到達度を客観的に省察し、次期の履修計画や学修目標の策定に主体的に活用できる環境を整備している。

文学部第1部 第1部哲学科 3年

3年・春学期 (2023年度)

GPA推移

GPAポジション

DP達成状況 (学期毎)

DP達成状況 (累計)

■学期GPAの推移 グラフ切替: 累計GPAにする 📘 グラフ・メダルの表示について

学年	あなたのGPA	同学年・同学科の平均GPA
2020春・1年	2.73	3.26
2020秋・1年	3.01	3.37
2021春・2年	3.33	3.44
2021秋・2年	2.93	3.21
2022春・3年	0.71	3.36
2022秋・3年	-	3.24
2023春・3年	-	3.01

3年・春学期 (2023年度)

学期GPA: 2.83  
累計GPA: 2.94  
出席率: %

[時間割を見る](#) / [目標管理シートを見る](#)

※平均GPAは、各年度/学期時点で学科(専攻がある場合は専攻)と学年があなたと同じ方を母集団として算出しています。  
■/■:あなたのGPA  
■/■:同学年・同学科の平均GPA  
📘 GPAについて

GPAは成績に関する情報のため、初めは非表示としています。下の表示/非表示を切り替えて閲覧してください。

表示

### ■GPAポジション

3年・春学期 (2023年度)

☹️ あなたの成績ポジションはゾーンDにいます。より充実した学修となるよう、学修計画や事前・事後学習の取り組み方を見直しましょう。

※GPAポジションの判定は、各年度/学期時点で学科(専攻がある場合は専攻)と学年があなたと同じ方を母集団として算出しています。(休学等で成績が付いていない方は母集団から除かれています)

※あなたと同値のGPAの方がいる場合、「あなたのGPAポジション」のラインは同値の層の下増えに引かれるため、やや低い位置に表示されます。なお、表示されているGPAの数値に誤りはありません。

📘 GPAについて

GPAポジションは成績に関する情報のため、初めは非表示としています。下の表示/非表示を切り替えて閲覧してください。

表示

文学部第1部 第1部哲学科 3年

3年・春学期 (2023年度)

GPA推移

GPAポジション

DP達成状況 (学期毎)

DP達成状況 (累計)

📘 2022年度/春学期 下記の一対一マトリクスは、本学部の成績 (GPA) をディプロマポリシー(DP)と表示し、同学科・同学年の平均との比較を明示したものです。アプリのマトリクスに搭載されているどのようなグラフや機能に合わせたかを客観的に把握してみてください。

📘 あなたの成績、専攻のディプロマポリシー  
📘 DP達成状況の卒業について

DP	あなたのGPA	同学年・同学科の平均GPA
DP1	2.91	3.32
DP2	4.00	3.23
DP3	3.26	3.33
DP4	3.53	3.47
DP5	4.00	3.18

※あなたの専攻・専攻のDPに科する存在科目のみ表示されています。すべての履修科目および成績はToyoNet-Qで確認してください。

DP達成状況 (学期毎) は成績に関する情報のため、初めは非表示としています。下の表示/非表示を切り替えて閲覧してください。

表示

# TOYO date portalによるデータ提供とデータリクエスト分析

## ●「TOYO date portal」にて教学に係る各種データを提供

学内の教学データを集約・提供する「TOYO Data Portal」を運用し、エビデンスに基づく迅速かつ的確な意思決定を支援。主に、以下の役割を担っている。

(学生の今を知る)

公式アプリから得られる学修行動ログをはじめ、学生に関する最新情報を可視化。各種会議や検討の場で、学生の現状を即座に把握できる環境を提供している。

(情報の集約と効率化)

散在していた学内の各種統計資料を一括管理。データを探す手間を大幅に削減し、全ての教職員が共通のエビデンスに基づいて議論に専念できる体制を整えている。

(分析の深化)

「より深い分析が必要」「特定の切り口でデータを確認したい」といった各組織固有のニーズに応えるデータリクエスト機能を完備。



## ●データリクエスト分析

〈ねらい〉

カリキュラムをはじめ、教育、学生支援の充実施策の検討、入試方式や進路実績の検証等に活かすことを目的に、各学科からのリクエストに応じて、オーダーメイドでのデータ分析支援を実施。

### GPA | 入試種別間比較

学部	ID	入試分類	ID	入試種別	学生数	GPA平均値	標準偏差	
学科: [redacted]... (1)	1	推薦	11K	[redacted]	4	3.53	0.33	
			11U	[redacted]	9	2.93	0.46	
			120	[redacted]	16	2.94	0.75	
			140	[redacted]	4	3.25	0.12	
学年	-	-	150	[redacted]	20	3.10	0.66	
			170	[redacted]	2	3.77	0.13	
性別	-	-	-	-	-	-	-	
入試分類	-	2	一般試験	1.00E+00	[redacted]	10	2.66	1.10
				1A8	[redacted]	6	3.39	0.59
入試種別	-	-	1AA	[redacted]	30	2.96	0.81	

### 基礎演習I成績 | 入学年度・コース間比較

入学年度	1.5	2A	3B	4C	5.D	6.E	7*	良率一	総計
2017年	5	5	29	10			1		50
2018年	7	16	35	3			3		64
2019年	7	18	20	3					48
2020年	9	22	12	4					47
2021年	5	17	20	8					50
2022年	3	24	27	2					56
合計	36	102	143	30			4		315
2017年	3	13	37	8					61
2018年	3	18	42	2					65
2019年	1	11	28	7					47
2020年	2	14	23	7					46
2021年	3	15	27	8					53
2022年	1	11	28	8					48
合計	13	82	185	40					320
2017年	8	17	29	5					59
2018年	5	29	33	2					69
2019年	12	20	26	2					60
2020年	5	29	22	2					58
2021年	10	13	23	4					50
2022年	14	14	23	3			1		55
合計	54	122	156	18			1		351

コースによって分布が異なる傾向。  
●●コースと●●コースはBが多い。●●コースはAとBが多く、他のコースと比較してSが多い傾向。

入試データ検証のスライドに戻る

# 中長期計画の進捗管理以外の自己点検・評価について①

中長期計画の進捗管理に加え、大学基準協会の評価基準等に準拠し、「3ポリシー」「カリキュラム」「学生の受け入れ」「教員・教員組織」等について、全学的な点検を行っている。

## 文学研究科国際文化コミュニケーション専攻（大学院）の例

### カリキュラム点検・評価 3つのポリシー

評価項目	2023	2024
ODPにおいて、学生が身に付けるべき資質・能力等の学修成果の目標を明確にしているか。	○2023年3月に大学院生に対するショートセミナー（PowerPoint）を作成。その際に専攻の学修内容、開講科目と内容、大学院での学修の特徴と留意点、研究指導担当教員からのメッセージを掲載した。 ○新入生ガイダンスにて、カリキュラム、科目概要、修了までの要件について紹介。また、専任教員紹介を行うと同時に、大学院の学修のあり方、注意点について説明した。	○ポリシーの大枠は専攻の学修を反映している。運用面では、学部新年度ガイダンス、大学院進学相談会、大学院新入生ガイダンスでの説明内容の定着を図った（カリキュラム、科目概要、修了要件など）。 ○課題：近年顕著に増加している外国人学生へのポリシーの浸透ならびに、博士後期課程への接続にむけて必要。
OCPIにおいて、学修成果を達成するために必要な教育課程及び教育・学習の方法を明確にしているか。	○2023年3月に大学院生に対するショートセミナー（PowerPoint）を作成。そこにおいて、専攻の三つのポリシーをあらかじめ確認し、学生に明確に提示できるように工夫した。 ○新入生ガイダンスにて、カリキュラムポリシー、科目概要、専任教員紹介を行うと同時に、大学院の学修のあり方、注意点について説明した。 ○外国人が多いこともあるが、専攻での勉強、科目登録などの手続きなどにつき、大学からの周知では行きわたらない場合もあり、リマインドの手間を取った。	○HPに専攻の理念を示している。 ○新入生ガイダンスで学科の教育理念、授業、単位取得の注意点を解説した。 ○外国人が多いことから、新入生ガイダンスでは日本語と英語を適宜取り交せて説明を行った。 ○研究発表会など、節目にはトヨネットニュースで情報を流している。
○APIにおいて、入学前の学習歴、学力水準、能力等の求める学生像や、入学希望者に求める水準等の判定方法を志願者等に理解しやすく示しているか。	○指導教員を届けさせているがそこにミスマッチが生じる場合もありうるが、過去の入試問題の参照を通じ、以前に比べ、専攻の求める学修内容に関する準備をしてくる学生が出てきた。 ○学内推薦希望者について、指導教員・研究テーマ決定の際の意思疎通に課題があることが判明した（大学院担当でない教員が学部の指導教員である場合）。→対策を専攻で検討する予定。	○受験生に指導教員の希望を届けさせているがそこにミスマッチが生じる場合もありうる。募集書類に注意書きを盛り込んだ。 ○入試問題の適切性について検討を行い、受験生が力を発揮できるよう、一部科目の出題の方式に若干の変更を加えた。 ○学内推薦希望者について、指導教員・研究テーマ決定の際の意思疎通に課題が残る（大学院担当でない教員が学部の指導教員である場合）。→指導希望の教員、専攻長が学生の相談に乗った。

## 理工学部応用化学学科の例

### カリキュラム

評価項目	2023	2024
<カリキュラムレベル> ○学修成果の達成につながるよう、CPIに沿って授業科目を開設し、体系的なカリキュラムを編成しているか。	学修成果の達成のために必要な科目を開設しており、科目相互間、開講時期も適切である。体系的なカリキュラム編成になっている。	学修成果の達成のために必要な科目を開設しており、科目相互間、開講時期も適切である。体系的なカリキュラム編成になっている。3年秋学期に専門の選択科目が多く開講されているが、履修者が少ない。社会で必要とされる専門知識を幅広く修得できる機会であるので、進級ガイダンス等で履修を促す指導を引き続き行う。

## 経営学部経営学科

### 学生の受け入れ

評価項目	2024
○学生の受け入れに関わる状況を点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいるか。	入試方式別の入学時TOEICスコアの平均点を比較し、入学者選抜の適切性を教授会で確認している。指定校推薦入学者のGPAを追跡し、指定解除の判断材料としている。また、指定校推薦入学者の入学時TOEIC平均点が低いことから、2025年度よりすべての指定校に外部英語試験を課すことにした。数学必須入試の拡大（2024年度）など、全学の入試方針に沿った入試制度を継続的に実施している。

各組織の自己点検・評価結果(中長期計画&評価シート)は、こちらよりご参照ください。

リンク：<https://sites.google.com/toyo.jp/jikotenkoukai2024/?pli=1>

# 外部評価の実績

- 「[自己点検・評価活動推進に関する規程](#)」に基づき、学部・研究科に対し、自己点検・評価活動の客観性・妥当性を高めるため、中期計画の実施期間等を踏まえ、外部有識者から意見を聴くことを義務付けている。
- 学位プログラムレベルにおける外部評価は、3ポリシーに基づくカリキュラムや自己点検・評価結果に対し、外部有識者から多角的な視点を得ることを目的としている。具体的には、「入試・カリキュラム・キャリア」という一連の教育プロセスの観点から、伸長させるべき強みや、改善を要する課題を抽出・明確化し、得られた提言を中長期計画やカリキュラム運営、教育改善へと反映させる体制を構築している。

## 【直近の外部評価実績】

### 【経済学部】

受審年度：2023年度

評価結果（要旨）：

入試での数学必須化やリメディアル教育による数学ケア、GPAの活用、副査制による卒論の質保証が高く評価された。一方で、学生へのDP説明やカリキュラムマップに沿った履修の検証、ゼミ非必修学科での履修支援強化が課題として指摘された。入試面では、方式と個々の学生の成長の関連性を検証する必要性が指摘された。キャリア面では、学生が学修成果を誇りを持って語れる支援が求められた。各学科の特色を活かしつつ、学部としてのまとまりを維持し、相互に改善し合える環境作りを継続することが期待されている。

### 【経営学部】

受審年度：2025年度

評価結果（要旨）：

1年次の導入教育や3年間にわたるゼミ教育が「考える力」を養う優れた体制として高く評価された。また、経営トップによる講義などの実学的なキャリア支援も学部の強みとなっている。課題としては、経営学科で導入された入試の数学必須化を巡り、実社会での数学の重要性と未受験者へのフォローのあり方が議論された。また、学科間の柔軟な連携維持や、第2部における経済界と協力した新たな支援策の検討、第一志望でない学生の意欲向上などが指摘された。これらの意見を反映し、社会に貢献する「有為な人材」の育成をさらに推進することが期待されている。

# 学修成果の活用に係る現状認識

## 現状分析と課題

- 現在、各学科においてDPと紐づく科目のGP（グレードポイント）の平均をレーダーチャート化し、DPという人材養成の目的の達成状況を可視化している。しかし、当該データの把握のみでは、具体的な改善アクションには繋がりにくい。
- 一方、科目群ごとのGPのばらつきや、入試方式とGPAとの相関などの検証の場合、カリキュラム、入試方式等の検証など、具体的な改善活動に繋がりがやすい傾向にあることも確認されている。

## 実質化に向けた方向転換

- 従来の「学修成果の測定に関する基本方針」は、指標の策定方法に留まっており、「いつ、どのデータを用いて、どのような改善に用いるか」といった具体的な活用方針が明確でなかった。
- 今後に向けて、新たに「(仮称)学修成果測定結果の活用方針」を策定し、具体的なデータ活用例を示し、各組織における標準的な自己点検・評価活動のエビデンスとして用いるように仕組みを構築し、内部質保証の実質化を加速させたい。
- 活用方針について、あくまでも例示として次ページにイメージを示す。

# 「学修成果測定結果の活用方針」 (素案)

項目	検証内容・方法	頻度	改善アクション
カリキュラム検証	<ul style="list-style-type: none"> <li>・科目群GPA (科目群の成績のばらつき)</li> <li>・必修科目GPA</li> <li>・初年次科目コース別GPA</li> <li>・異常値 (S評価のみ、D評価のみなど)</li> </ul>	毎年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コース数見直し</li> <li>・シラバス見直し</li> <li>・クラス分け方法見直し</li> <li>・共通テキストの検討</li> <li>・CPの見直し など</li> </ul>
入試検証	<ul style="list-style-type: none"> <li>・入試方式×GPA</li> <li>・高校ランク×GPA</li> <li>・英語外部試験利用入試×GPA</li> </ul>	毎年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・入試の教科の見直し</li> <li>・推薦比率の見直し</li> <li>・APの見直し</li> </ul>
DPの到達度検証	<ul style="list-style-type: none"> <li>・DP×GPのレーダーチャート</li> <li>・学科独自指標の達成状況</li> <li>・進路先、取得資格状況</li> </ul>	2年に一度、またはカリキュラム改訂の2年前から 毎年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コース制の見直し</li> <li>・準正課等の教育プログラムの検討</li> <li>・学科再編等の検討</li> <li>・DPの見直し など</li> </ul>

# 第4章

## 教育DX推進基本計画の進捗

# 東洋大学教育DX推進基本計画について

- 2020年4月以降、新型コロナウイルス感染症対策をきっかけに、学生の教育研究活動維持のために、次の4つの観点から

- ポストコロナ対策として、対面・非対面授業における授業設計の研究
- ICT活用推進施策、施設・設備に関する環境整備等の支援体制の充実
- 学士課程教育における質保証の為の高度な授業改善
- カリキュラムマネジメントを目的とした対面・非対面授業に関するFDの体系化

「東洋大学教育DX推進基本計画」を策定した。

- 本計画は5つの計画から構成され、本稿では計画1・計画2に絞って詳述する。

今回の評価  
対象

**計画1：入学から卒業まで一貫した教育情報のデータ統合とAI解析結果の最適活用**

**計画2：オンキャンパスとオフキャンパスの学習スタイルの高度化と多様化**

計画3：建学の精神の具現化を目的としたリカレント教育の世界展開（国内地域含む）

計画4：学生の成長を中心に据えた体系性あるFD・SDプログラムの構築と学内業務の断捨離

計画5：デジタル活用推進本部による推進体制と外部人材を取り入れた評価体制

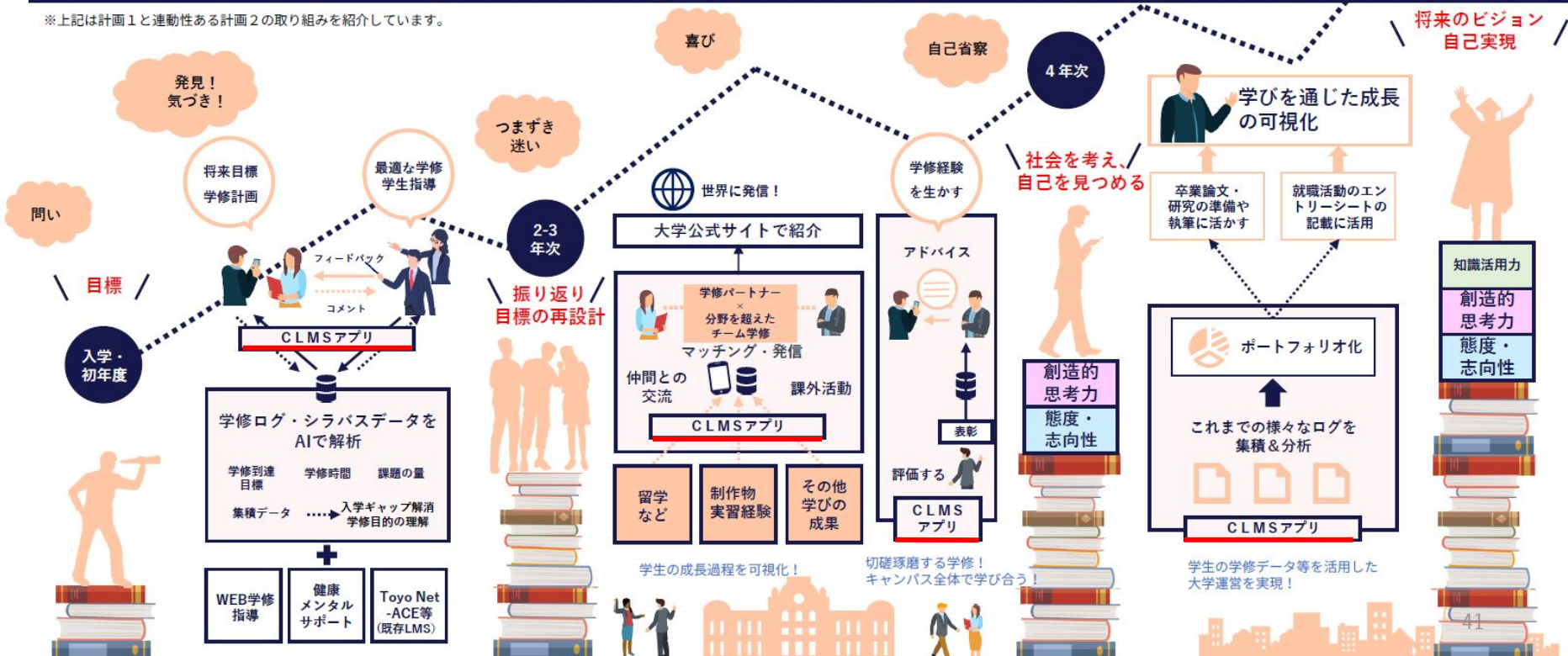
# 計画 1

## "3万人のLearning Journey"の羅針盤となるCLMS (イメージ図)

～デジタルを活用した教育を実現、入学から卒業、卒業後も学修データを活かせるシステムへ。統合型LMSへの進化～



※上記は計画1と連動性ある計画2の取り組みを紹介しています。



# 計画 1：入学から卒業まで一貫した教育情報のデータ統合とAI解析結果の最適活用

前頁のイメージ図における「CLMS（Campus Learning Management System）アプリ」は、2021年に開発した「[スマートフォンアプリ（東洋大学公式アプリ）](#)」と「学修成果確認システム」を指しており、前者においては以下の機能により入学から卒業までデジタルを通じて学習過程をサポートする。

## 〔東洋大学公式アプリの機能〕

・ My Journey	AIによる4つのキャラクターとの日常対話を通じ、学生の問いを深めながら履歴を残し自己省察を促す
・ TOYO Discover	イベントや学生体験につながる各種情報の周知機能<ポスター形式表示>
・ TOYO Calendar	大学学年暦や運動部スポーツ試合スケジュール、各種窓口時間帯等の予定をスマホで閲覧できるようポータル化
・ TOYO Navi	学修成果確認システム、各種FAQや情報ソースへのアクセス学生視点で逆引き的に網羅
・ TOYO PASS	本人確認QR表示、入場管理チェックイン、読み取り後の履歴管理などの入退出機能
・ TOYO Info	配信対象を限定し、特定の学生に対するお知らせ機能・11言語の翻訳
・ Class	履修に関する情報、時間割、講義メモ、出欠記録、ToDo、休講情報のプッシュ通知など

# 計画1：入学から卒業まで一貫した教育情報のデータ統合とAI解析結果の最適活用

## My Journey機能

My Journey 2026/11/10 10:45

大学の履修登録ガイドスを聞いたけどわからないことがある。どうしたらいいかな？  
まだ1年生だし、先輩や友人もいないしどうしたらいいかわからない。周りの人にも聞けないよ。

望月先輩

おはようございます。  
はじめまして、望月だよ。いつもはキャンパスの木陰でのんびりしてるんだ。こうしてあなたと話せるのを楽しみにしてたよ。私はちょっと動物が好きすぎるところがあるんだけど、まあそこは大目に見てくれると嬉しいな。何かあったら遠慮なく話してみて。できる限り、あなたの気持ちに寄り添いながら一緒に考えていきたいんだ。

履修登録のことで、少し困っているんだね。まだ1年生で、周りに相談できる人がいないと感じているんだね。一人で抱え込んでしまっ、誰にも聞けないって思うと、心細い気持ちになるよね。

どんなことが特に気になっているのかな？例えば、授業の選び方なのか、それとも単位のことなのか、それとも、もっと漠然とした不安な気

## TOYO Discover機能

17:17 TOYO-discover

配信元：すべて

4 7 3

8 6 16

7 11 19

TOYO Discover機能は、様々な教育情報やイベントの通知を配信するプラットフォームです。例えば、図書館情報、能登半島豪雨、ボランティア支援室、国際大学説明会、ILLUMINATION LIGHTING CEREMONY 2024、助成金、第94回定期演奏会、GLOBAL PARTNERSHIP、2024年、などに関する情報が提供されています。

## TOYO Calendar機能

calendar.google.com

2026年1月

月	火	水	木	金	土	日
29	30	31	1月1日	2	3	4
大学院教務課/Graduate school office CLOSED						
短期大学証明書窓口 CLOSED						
学部教務課CLOSED						
証明書発行機CLOSED						
5	6	7	8	9	10	11
学部教務課 10:00-13:00,14:00-19:00 (国際教)						
大学院教務課/Graduate school office 10:00-						
短期大学証明書窓口 10:00~12:30,14:00~16:3						
証明書発行機取扱時間10:00-20:00						
12	13	14	15	16	17	18
大学院教務課 10:00-13:00,14						
学部教務課 大学院教務課/Graduate sci						
短期大学 短期大学証明書窓口 10:00-						
証明書発行機取扱時間10:00-						
19	20	21	22	23	24	25
学部教務課 10:00-13:00,14:00-19:00 (国際教)						
大学院教務課/Graduate school office 10:00-						
短期大学証明書窓口 10:00~12:30,14:00~16:3						
証明書発行機取扱時間10:00-20:00						
26	27	28	29	30	31	2月1日
学部教務課 10:00-13:00,14:00-20:00 (国際教)						
大学院教務課/Graduate school office 10:00-						
短期大学証明書窓口 10:00~12:30,14:00~16:3						
証明書発行機取扱時間10:00-20:00						

## TOYO Pass機能

TOYO-PASS

2023/10/27  
10:29:45

02:56

TOYO

学籍番号 12345678900  
氏名 東洋 太郎  
学年 2年4 semester  
所属 国際学部  
国際地域学科  
地域総合専攻

他人への貸与(学生証含む)を禁じます。  
悪用処分の対象となる場合があります。

イベントQRをスキャン



## 履修登録を始める前に

学んだ先の未来を描いて  
あなただけの履修プランを考える

### 総合知アプリ

- 東洋大学が提供する総合知教育では幅広い科目を履修することができます
- たくさんある科目の中から自分に必要な科目を選ぶには、まずは学んだ先の自分の姿を描くことが大切です
- 『総合知アプリ』のAIは複数の学問を学んだり、自分の専門外の科目を学んだ先のような未来があるかを考える手助けをしてくれます



<https://toyo-ck.web.app/home>

## 履修登録で困ったら

履修要覧などの資料から  
必要な情報を見つける

### AI履修情報検索アシスタント

- 履修する科目が決まったら履修登録です
- 履修には様々なルールがあり、それを間違えるとせっかくの学びの機会を見逃してしまう場合もあります
- あなたに必要な履修情報を見つける手伝いをするのが『AI履修情報検索アシスタント』です
- AIから提供される情報を基に履修要覧などを読み込んでいきましょう



東洋大学公式アプリ > NAVI  
> 授業全般からアクセス

<https://www.toyo.ac.jp/academics/improve/vision/dx/application/>

## 授業がはじまっても

学びの旅を振り返り  
あなたの未来を描き続ける

### 東洋大学公式アプリ My Journey

- あなたがより輝ける未来にたどり着くには授業を受けることはもちろん大切です
- それだけではなく、その中で学んだこと感じたことを振り返り、自分にとってより良い未来が何かを考え続けることも大切です
- あなたは『My Journey』に学びや経験を記録することによって振り返ることができます
- さらにAIはあなたの記録に返信して振り返るきっかけをくれます



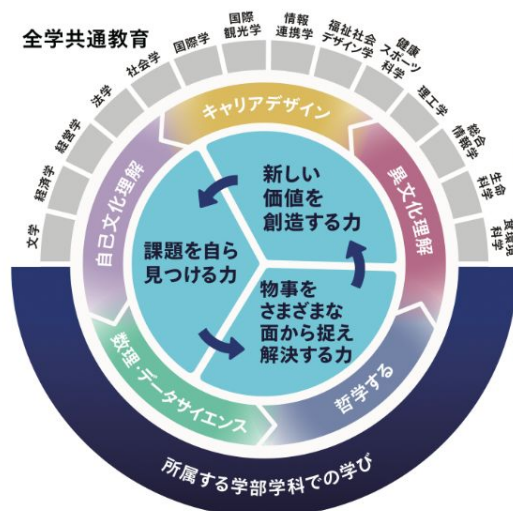
<https://www.toyo.ac.jp/academics/improve/vision/dx/application/>

「総合知」教育、始動

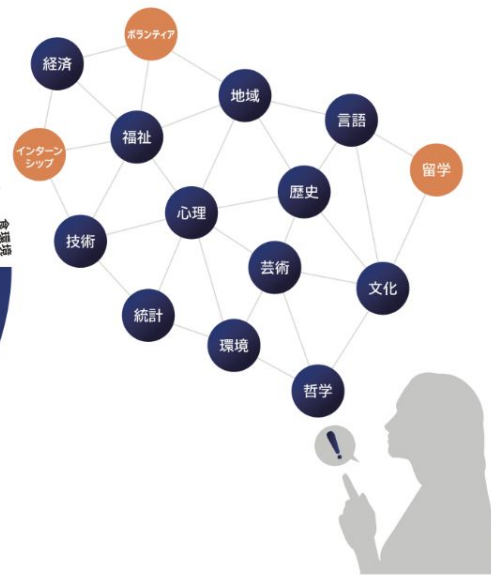
NEW 2025年4月 START

## 2025年4月、14学部すべての学びを柔軟に履修できる新しいカリキュラムをスタート

2025年4月より、すべてのキャンパスの多様な学問の連携、融合を図る「総合知」教育をスタート。各学部の専門性に依拠した学問を集結し、所属学部や領域を超えた新しい総合的な学びを創出します。自分の専門性を主体的に磨き、異分野にチャレンジする学生を育てます。



一人ひとりに最適化した Learning Journey



# 計画1：入学から卒業まで一貫した教育情報のデータ統合とAI解析結果の最適活用

## 学生の学びを支えるため、AIを活用した「総合知アプリ」を学内開発・導入

多彩な学びの選択肢の中から自分の学びをデザインするために、AIを活用した「総合知アプリ」を学内開発しました。AIによる様々な提案により、学生自身も気づいていない自らの興味や可能性の発見をナビゲートするなど、学生の学びをサポートするためのアプリです。具体的な機能は以下の4点です。

- 1 事例紹介(Collection)：総合知を活かしたキャリアを歩んでいる卒業生等の事例を紹介します。総合知を学ぶ効果をロールモデルとして示すことでイメージを喚起し、学びへのモチベーションを高めます。
- 2 学問の組み合わせ生成(Simulator)：自分の専門分野、興味のある学問分野、これまでの経験、将来実現したいことなどを設定することで、それらがどのようなキャリアや活躍の場につながるのかをAIが生成し、提案します。これにより、学生自身が気づいていない新たな視点を得ることもつながります。
- 3 科目検索(Navigator)：興味を持つ分野、学んでみたい分野を見つけたら、それを学ぶための科目を検索できます。条件に合うものを表示するだけでなく、専門分野とその科目が組み合わせることで生まれる価値も示します。
- 4 AI履修情報検索アシスタント：履修に関する困りごとを検索できるAIアシスタント機能です。



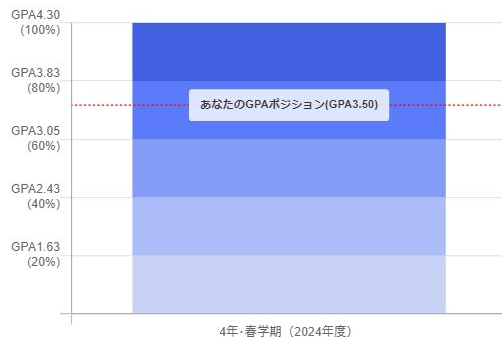
# 計画 1：入学から卒業まで一貫した教育情報のデータ統合とAI解析結果の最適活用

学修成果の把握と指導充実のためのデータ利活用の一環として、学修成果確認システムを用いて、学生の履修指導や単位僅少者面談等に活用しており、学生個々の状況に応じた指導に活用する。

## 学科内のGPAポジション比較

### IGPAポジション

4年・春学期 (2024年度)

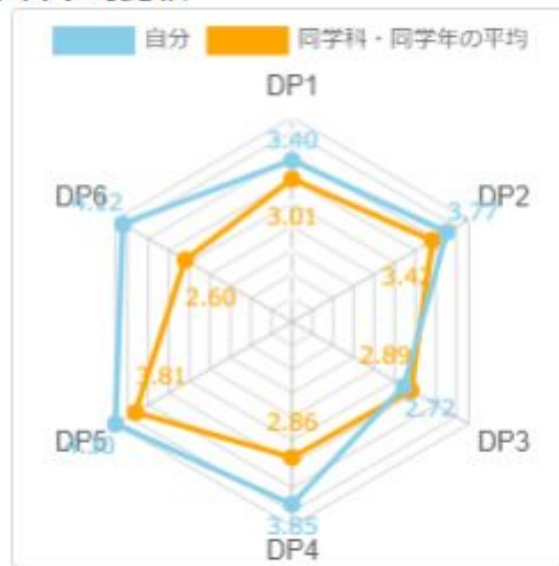


あなたの成績ポジションはゾーンBにいます。より充実した学修となるよう、高い目標をもって引き続き取り組みましょう。

※GPAポジションの判定は、各年度/学期時点で学科(専攻がある場合は専攻)と学年があなたと同じ方を母集団として算出しています。(休学等で成績が付いていない方は母集団から除かれています)

## DP毎の達成度学科内比較

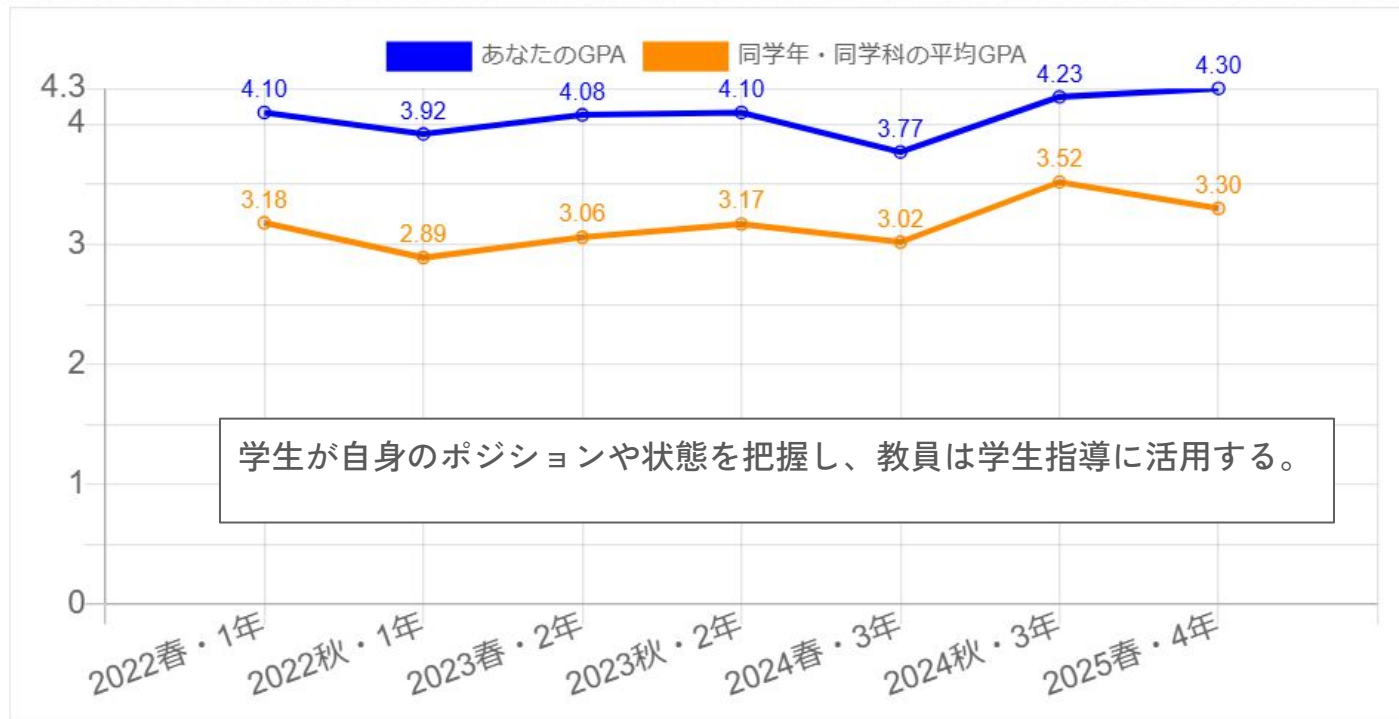
### 学科平均比較



# 計画 1：入学から卒業まで一貫した教育情報のデータ統合とAI解析結果の最適活用

## 入学から卒業までのGPA推移のグラフ化

■学期GPAの推移    グラフ切替： 累計GPAにする




# 計画2：オンキャンパスとオフキャンパスの学習スタイルの高度化と多様化

## 1. 柔軟な学年暦の導入 (13+2)

**13+2とは...?**

セメスター科目は13週、クォーター科目は7週の通常授業期間内で13回の通常授業を実施し、その他に+2回分のワグワグ授業や学外における演習・実習・研修等を実施する授業形態のことです。  
+2回分の授業は通常授業期間及び試験・補講期間に行われることもあれば、後述するT-Weeks等、通常授業期間外に実施されることもあります。

※13+2は基本形であり、従来通り2回以上ワグワグ回のある授業やワグワグ授業もあります。また、一部実験実習科目等で全回通常の対面授業を行う科目もあります。



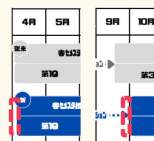
春学期					秋学期						
4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
春学期授業期間					秋学期授業期間						
第10 第20					第30 第40						
夏・春セッション											

夏・春セッション

セッション期間が約1ヶ月延び、海外留学やインターンシップ、ボランティア等の課外活動をもっとしやすく！  
同期間には就職支援プログラム等、  
大学主催の各種プログラムも実施予定です。

**T-Weeks**

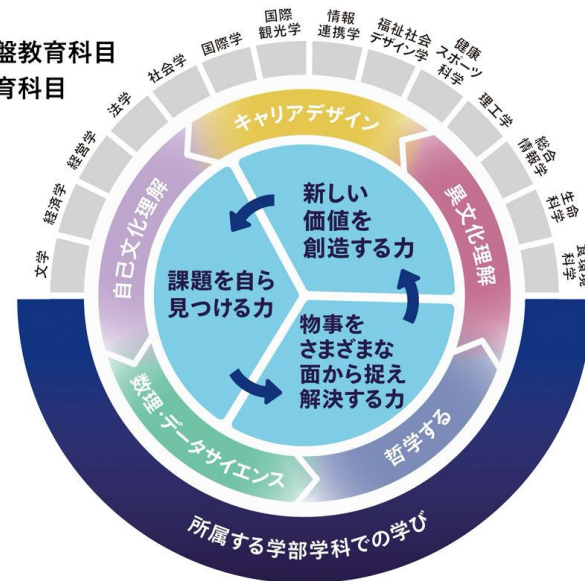
各学期の開始前に、10日間程度の新たな期間（T-Weeks）を設けます。T-Weeksは学生が主体的に多様な学びに取り組む目的で新たに設ける期間です。学修計画を丁寧に検討したり、補習や各種ガイダンスを受けたりするなど、本学の学びの価値をより一層豊かにする活動期間といたします。



## 2. 「総合知」教育

■すべてのキャンパスがひとつに。  
総合的に知をつなぐ新しいカリキュラム

全学基盤教育科目  
共通教育科目



一人ひとりに最適化したLearning Journey

# 柔軟な学年暦の導入 (13+2)

- 13+2とは、2026年度から新たな学びの機会の創出を目的として、授業期間を従来の各学期15週から13週へと短縮し、残りの2回分に相当する授業をオンデマンド授業その他の方法で実施する。
- 授業期間を13週に短縮することで新たに生まれる時間(年間4週分)を活用し、「学生の多様な学びの機会の創出」「学修指導の充実」「教員の研究活動の充実」を目指している。

## 学年暦変更のねらい

- 「学生の多様な学びの機会の創出」
  - 余裕のある学年暦
  - 多様な学びの可能性(課外講座、研修・実習、課題活動、海外渡航など)
- 学修指導の充実
  - 履修登録に先立つ授業内容の確認
  - オリエンテーション期間(「T-Weeks」)の拡充
- 教員の研究活動の充実

春学期						秋学期					
4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
従来の春学期授業期間						従来の秋学期授業期間					
第1Q		第2Q		夏休み		第3Q		第4Q		春休み	
新の春学期授業期間						新の秋学期授業期間					
第1Q		第2Q		夏休み		第3Q		第4Q		春休み	

# 柔軟な学年暦の導入（13+2）

2025年8月に開催した「学長フォーラム」では、学校法人・大学の執行部・各学部長において新たな学年暦を有効活用するための情報共有と指導の可能性に関する意見交換を実施した。

## 【各学部の取り組み例】

- 企業調査実習の実施（経営学部）
- 地方での就業体験の推進（国際観光学部）
- プログラミング、ハッカソンイベントへの参加（情報連携学部）
- 学会、シンポジウムにおける積極的な研究発表支援（食環境科学部）
- ゼミ合宿を通じた論理的対話力の育成（生命科学部）



ウェブリンク：

[https://www.toyo.ac.jp/assets/academic/improve/attempt/fdsd/president\\_forum/forum2025.pdf](https://www.toyo.ac.jp/assets/academic/improve/attempt/fdsd/president_forum/forum2025.pdf)

東洋大学公式アプリPR隊（本学学生）が学長インタビューに臨みました。新たな学年暦の魅力について、ぜひご視聴ください。



# 「総合知」教育

2025.04.02 | WED

## “学習者本位の教育”を実現する「総合知」教育を2025年4月から開始



東洋大学(東京都文京区)学長・矢口悦子氏は、2025年4月から「総合知」教育を開始します。

本学の「総合知」とは、「物事を多面的に深く考え、自分と他者の持つ知を重ね合わせて、総合的に判断をする力をもたらす知」を意味します。社会全体が変化を続けており、求められる力も多様化する現代社会においては、新たな価値を創造し、未来を生き抜く力を身につけるための教育が求められています。さらに「哲学」をルーツとする本学では、学生が自らの問いを持ち、その本質に迫って深く考えることが重要だと考えています。こうしたことから、今回の「総合知」教育の開始に当たっては、学生自身が学びを創る“学習者本位の教育”の実現を目指し、学部横断で科目を柔軟に履修できる新しいカリキュラムを導入します。また、その学習者本位の学びをサポートするツールとしてAIを活用した「総合知アプリ」を本学独自で開発しました。

### 東洋大学の「総合知」教育

哲学をルーツに持つ本学は、教育理念として「自分の哲学を持つ」「本質に迫って深く考える」「主体的に社会の課題に取り組む」を掲げています。学生が自らの問いを持ち、その本質に迫って深く考えるためには、学部の枠内で提供する従来型のカリキュラムだけでなく、学生自身が学びを創る“学習者本位の教育”を実現する必要があります。そのためには多様な知と出会う機会を広げることが不可欠であると考え、全学を挙げて「総合知」教育を設計しました。これにより獲得した力や経験を、社会課題に主体的に向き合い行動することにつなげてほしいと考えております。

### 「総合知」教育カリキュラムの概要

今回スタートする「総合知」教育カリキュラムは、学生自身が所属する学部の専門分野の履修科目に加え、他学部の分野の履修科目を主体的に掛け合わせ、それぞれの興味や関心、将来像に合わせて学びをデザインする“わたしの学び”を創ることができま。具体的には、総合大学として類例のない規模の全14学部・約600の専門科目を全学部共通の「全学基盤教育科目」「全学共通教育科目」として開講し、学生自身が所属する学部の専門科目とは別に、興味に応じた科目を学部やキャンパス横断で履修することができます。

「全学基盤教育科目」:これまで学部やキャンパスで分かれていた基盤教育科目を刷新し、全学部共通の基盤教育とすることにより、科目の種類と数がより一層増えます。

「全学共通教育科目」:全14学部から提供される専門科目群です。従来からみられる、他の学部の科目を、別の学部の学生も受講できるという他学部開放科目等と異なり、他学部の学生が初めて学ぶことを前提とした科目群です。そのための講義のあり方やメソッド開発も進めています。

### 学生の学びを支えるため、AIを活用した「総合知アプリ」を学内開発・導入

多彩な学びの選択肢の中から自分の学びをデザインするために、AIを活用した「総合知アプリ」を学内開発しました。AIによる様々な提案により、学生自身も気づいていない自らの興味や可能性の発見をナビゲートするなど、学生の学びをサポートするためのアプリです。具体的な機能は以下の4点です。

- 1 事例紹介(Collection):総合知を活かしたキャリアを歩んでいる卒業生等の事例を紹介しながら、総合知を学ぶ効果をロールモデルとして示すことでイメージを喚起し、学びへのモチベーションを高めます。
- 2 学問の組み合わせ生成(Simulator):自分の専門分野、興味のある学問分野、これまでの経験、将来実現したいことなどを設定することで、それらがどのようなキャリアや活躍の場につながるのかをAIが生成し、提案します。これにより、学生自身が気づいていない新たな視点を得ることもつなげられます。
- 3 科目検索(Navigator):興味を持つ分野、学んでみたい分野を見つけたら、それを学ぶための科目を検索できます。条件に合うものを表示するだけでなく、専門分野とその科目が組み合わせることで生まれる価値も示します。
- 4 AI履修情報検索アシスタント:履修に関する困りごとを検索できるAIアシスタント機能です。



# 総合知教育履修状況（2025年度春学期）(1/2)

- 新生のうち734名（9.3%）が、キャンパスを越えて、全学基盤教育科目・全学共通教育科目を履修。
- 特に、イブニングの学生は194名となっており、新生の18.4%程度が履修した。

## 履修の実例①

- 文学部 日本文学文化学科(第1部)(白山)の学生
  - 川越開講の「数学」をオンデマンドで受講
- 経済学部 経済学科(第2部)(白山)の学生
  - 赤羽台開講の「地域マネジメント」を対面で受講
- 国際学部 国際地域学科 地域総合専攻(白山)の学生
  - 川越開講の「データサイエンス概論」をオンラインで受講
- 生命科学部 生命科学科(朝霞)の学生
  - 白山開講の「社会学入門」を対面で受講

2025年5月9日学部長会議資料

## 1. 総合知教育について

学生（新生）の履修希望しているデータを元に希望した学生を確認しました。

計画2関連

	対面	他キャンパス			備考	
		オンデマンド	同時双方向	集計		
第1部	文	3	61	0	64	
	経済	3	59	0	62	
	経営	2	54	6	62	
	法	3	20	0	23	
	社会	2	34	1	37	
	国際	0	7	0	7	
	観光	1	12	0	13	
	白山計	14	247	7	268	2方式履修者11名
		5.2%	92.2%	2.6%	100.0%	
	理工	9	62	0	71	
	総情	9	109	0	118	
	川越計	18	171	0	189	3方式履修:1名 2方式履修:25名
		9.5%	90.5%	0.0%	100.0%	
	生命	6	21	2	29	
食環境	0	21	0	21		
朝霞計	6	42	2	50	3方式履修:1名 2方式履修:6名	
	12.0%	84.0%	4.0%	100.0%		
情報連携	49	0	0	49		
INIAD計	49	0	0	49	複数方式履修なし	
	100.0%	0.0%	0.0%	100.0%		
福祉デ	0	3	1	4		
健スポ	0	15	11	26		
W・H計	0	18	12	30	複数方式履修なし	
	0.0%	60.0%	40.0%	100.0%		
第1部計	87	478	21	586		
	14.8%	81.6%	3.6%	100.0%		
第2部・イブ	文	1	28	0	29	
	経済	1	70	0	71	
	経営	1	29	1	31	
	法	0	18	1	19	
	社会	0	37	0	37	
	国際	2	21	0	23	
	イブニング計	5	203	2	210	3方式履修:1名 2方式履修:14名
	2.4%	96.7%	1.0%	100.0%		
総計	92	681	23	796	実人数:734名	
	11.6%	85.6%	2.9%	100.0%		

履修の実例②

機械工学を専門に学んでいる大学1年生の春学期は、研究の土台となる「微分積分学基礎」「化学I」「物理学A」などの授業で、これからの専門的な学びに備えます。まずはしっかりと基礎を固めることからスタートです。

理工学部の授業は主に川越キャンパスで行われますが、大学全体の「総合知」教育カリキュラムの仕組みを使って、白山キャンパスの授業にも参加しています。たとえば、白山キャンパスでの「ドイツ語IA」から1週間がスタート。さらに、水曜・木曜は川越で授業を受けた後、4限には白山キャンパスに移動して「IELTS for Study Abroad I Listening / Speaking」を学びます。

このように、専門分野である機械工学の知識を深めながら、語学や教養の学びにも力を入れられるのが東洋大学の魅力。キャンパスをまたいで多様な学びに触れられる環境は、自分の可能性を広げるチャンスに満ちています。

川越キャンパス  
理工学部機械工学科

	月	火	水	木	金	土
1	ドイツ語IA <small>白山開講科目</small>	白山開講科目	情報処理基礎演習		物理学A	
2		Academic English I	化学I		日本語リテラシーI	
3		Prep for TOEIC Test I		Writing I		
4	微分積分学基礎			白山開講科目		
5	機械工学序論I		IELTS for Study Abroad I L/S	IELTS for Study Abroad I L/S		
他	人類学A（オンデマンド）			白山開講科目		
他	地域文化研究E（オンデマンド）			赤羽台開講科目		

4/15(火)時点  
(春学期履修登録終了時点)

9/17(水)時点

		4/15(火)時点 (春学期履修登録終了時点)	9/17(水)時点
新入生サイト	「 <u>授業のしくみ</u> 」動画再生回数	7,676回	8,016回
総合知アプリ*	アクティブユーザー数 (ログイン不要のトップページ・Collection画面に アクセスしたユーザー含む)	4,754	5,816名
	ログイン者数	1,947名	2,185名
	動画① (総合知紹介) 再生回数	817回	1,289回
	動画② (アプリ紹介) 再生回数	654回	999回
	Simulator利用回数	832回	958回
	Navigator利用回数	1,727回	2,150回
AI履修情報検索 アシスタント*	利用回数	874回	1,180回
公式アプリ 投稿Journey*	投稿回数 (80文字以上)	1,551回	4,571回

### 3. 教育DX推進基本計画におけるアウトプット指標/アウトカム指標の達成状況について

- 教育DX推進基本計画においては、デジタルを活用した学修者本位の教育の実現と大学全体の高度化・質保証に寄与するため、主要な計画である「計画1」および「計画2」において、それぞれアウトプット指標とアウトカム指標を設定している。
- アウトプット指標では学生のシステム利用状況等を測定し、学生が自身の学修到達度を客観的に捉えることができる「学修成果システム」へのアクセス状況等の向上を測る事としている（GPAポジション・DP毎の達成度）。
- アウトカム指標においては、これらの取組みが学生の成長にどれだけ影響を与えたか、例えば大学に対する全般的な観点からは「東洋大学に満足しているか」、教育の観点からは「授業評価アンケートの結果を踏まえて、本学の授業運営が学生にとって良かったかどうか」を測定している。
- 次ページ以降で詳細を報告する。

### 3. 教育DX推進基本計画におけるアウトプット指標/アウトカム指標の達成状況について

#### 【計画1】

①アウトプット指標：公式アプリを經由して、学生自身のGPAポジションの確認や学習計画上のアドバイスコメントの閲覧者数

(目標) 全学部生の70%

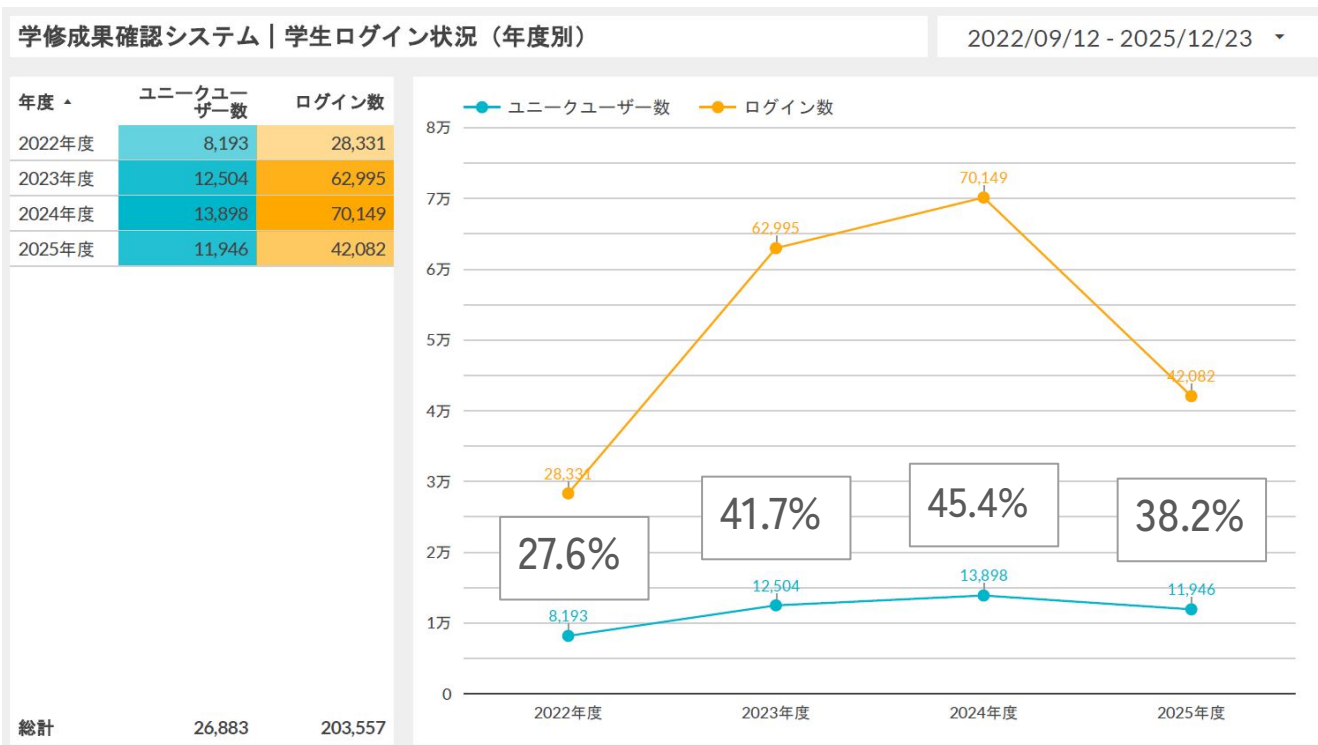
(実績) 2025/12/23現在

**38.2%**

(約30%不足)

**目標未達**

年度	学生数	閲覧率
2022	29,695	27.6%
2023	29,958	41.7%
2024	30,592	45.4%
2025	31,311	<u>38.2%</u>



### 3. 教育DX推進基本計画におけるアウトプット指標/アウトカム指標の達成状況について

#### 【計画1】

②アウトカム指標：在学生アンケートで取得している学生満足度「東洋大学に満足していますか。」の向上

(目標) 前年度よりアップすること

(実績) 大学全体の集計結果は下表のとおり

	2019年度 回答 8,326名	2021年度 回答 11,522名	2022年度 回答 6,750名	2023年度 回答 6,784名	2024年度 回答 4,643名
1. 満足している。	31.0 %	34.4 %	39.7 %	45.7 %	50.8%
2. やや満足している。	48.8 %	47.5 %	47.4 %	43.6 %	40.9%
3. あまり満足していない。	14.1 %	13.9 %	9.5 %	8.2 %	6.7%
4. 満足していない。	6.1 %	4.2 %	3.4 %	2.6 %	1.6%
満足・やや満足合計	79.8%	81.9%	87.1%	89.3%	91.7%

「満足している」「やや満足している」の合計 89.3% → **91.7%** (2.4%↑) 昨年度は2.2%の上昇

※2020年度は新型コロナウイルス対策を目的とした調査としたため、大幅に設問を変更したため対象外とする。

目標達成

### 3. 教育DX推進基本計画におけるアウトプット指標/アウトカム指標の達成状況について

#### 【計画2】

##### ①アウトプット指標：非対面授業（オンライン授業）の開講状況

（目標）非対面単位認定科目の開講数 5%程度

（実績）2025年度における学部・大学院の集計結果は下表のとおり

課程	コース数	前年同期比	非対面コース数	非対面授業率
学部	12,824	+9	536	<u>4.2%</u>
大学院	2,248	+59	146	<u>6.5%</u>
合計	15,072	+68	682	<u>4.5%</u>

2024年度 4.3% → **4.5%** (0.2% ↑) 微増ではあるが0.5%不足

目標未達

### 3. 教育DX推進基本計画におけるアウトプット指標/アウトカム指標の達成状況について

#### 【計画2】

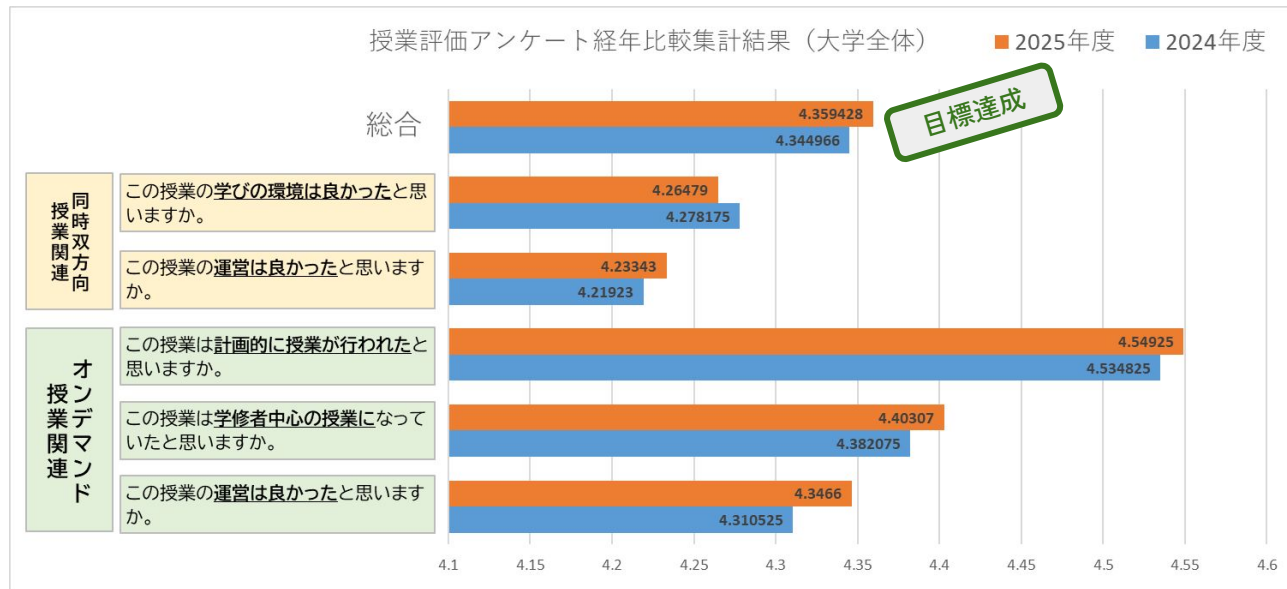
#### ②アウトカム指標：授業評価アンケート結果のうち非対面単位認定科目の経年比較

(目標) 目標：授業のわかりやすさ、学習内容の理解、到達目標の達成のポイントが前年度より通年で上昇すること。

(実績) 2024年度（通年）と2025年度（春学期）における比較

※2025年度通年分（秋学期）については3月中旬に公表

[結果詳細は本学HPにて公開](#)



授業評価アンケートにおいて、同時双方向・オンデマンド授業がDXを活用したうえで、学修者本位で実施されているかを検証。同時双方向・オンデマンド授業における総合評価において、2025年度が2024年度を僅かに上回った。

### 3. 教育DX推進基本計画におけるアウトプット指標/アウトカム指標の達成状況について

教育DX推進基本計画におけるアウトプット指標・アウトカム指標の達成状況のサマリー

	【DX計画1関連】 入学から卒業まで一貫した教育情報のデータ統合とAI解析結果の最適活用	【DX計画2関連】 オンキャンパスとオフキャンパスの学習スタイルの高度化と多様化
アウトプット指標	<p>○公式アプリを經由して、学生自身のGPAポジションの確認や学習計画上のアドバイスコメントの閲覧者数</p> <p>目標：全学部生の70% → <u>38.2%</u></p> <p><b>目標未達</b> 31.8%不足</p>	<p>○非対面授業（オンライン授業）の開講状況</p> <p>目標：非対面単位認定科目の開講数 5%程度 → 4.5%</p> <p><b>目標未達</b> 0.5%不足</p>
アウトカム指標	<p>○在学生アンケートで取得している学生満足度「東洋大学に満足していますか。」の向上</p> <p>目標：前年度よりアップすること → アップした</p> <p><b>目標達成</b> 2.4%超過</p>	<p>○授業評価アンケート結果のうち非対面単位認定科目の経年比較</p> <p>目標：授業のわかりやすさ、学習内容の理解、到達目標の達成のポイントが前年度より通年で上昇すること → 2025年度春学期までの集計では上昇した</p> <p><b>目標達成</b> 0.01ポイント超過</p>

アウトカム指標は達成しているが、アウトプット指標が達成できない傾向にある。

